

ジッドとチボーデ

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院教授

<https://doi.org/10.15017/18940>

出版情報 : Stella. 29, pp.1-40, 2010-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

ジッドとチボーデ

吉井亮雄

旧師ベルクソンの思想に深く影響を受け、「内面の持続」を追究したアルベール・チボーデ（1874-1936年）は、シャルル・デュ・ボス、ラモン・フェルナンデスとならぶ兩次大戦間の代表的な批評家としてつとに名高い。青年期の詩作をへて、やがて文学批評・政治評論に健筆をふるった彼の著作は、30冊ほどの著書（そのうちフローベールやスタンダール、マラルメ、ヴァレリーにかんする研究書、『フランス文学史』や小説論・批評論など邦訳されたものも多い）、新聞・雑誌に発表された約1,200点の評論・書評など、まさに膨大な数量にのぼる¹⁾。構造主義の隆盛にともない、一時はその伝統的・正統的なアプローチゆえにややもすれば過小に評価されがちであったが、驚異的な博識と類い稀な洞察力に支えられたその作品解釈・作家理解はいささかも古びてはいない。じじつ、この批評家への注目度は近年とみに高まっている。とりわけ2007年には、季刊研究誌『文学』が特集号を組み、また『新フランス評論』掲載の評論・書評を集めた『文学にかんする考察』、政治評論を纏めた『政治にかんする考察』という、合わせて3,000頁近い2冊の論集がアントワヌ・コンパニョンの手で編まれ（前者はクリストフ・プラドーとの共編）、チボーデ再評価の動きを強く印象づけた²⁾。

ちなみに批評家にかんする研究としては、若干数の雑誌掲載論文をのぞけば、1952年から67年にかけて公刊されたアルフレート・グラウザー、ジョン・C・デイヴィス、マルセル・ドゥヴォーによる3冊の著書以後³⁾、めぼしい成果は実質的に皆無という状況が長らく続いていた。またこの3著にしても批評的著作の分析やその方法論の検討を中心とするもので、伝記的・実証的な解明はほとんど手つかずであったといっても過言ではない。主因は同時代の作家・文学者らから受けた書簡をはじめチボーデ・アルシーヴの大半が早くに散逸したことであり、これが研究の進展を大きく妨げてきたのである⁴⁾。その意味で、2006

年に出版されたミシェル・レイマリー『アルベール・チボーデ、内部の〈アウトサイダー〉』の功績はことのほか大きい⁵⁾。著者は図書館・公文書館所蔵の未刊資料を渉猟・活用して批評家の「人と作品」の再構築を試み、ジッドとの交流にかんしては両者の往復書簡を参照している。本稿も関連部分の論述に負うところ大であるが、ただし当該資料体の扱い方にはいささか疑念を呈せざるをえない。未刊書簡からの引用が数語ないし数行と断片的なのは同書の対象領域の広さから当然としても、まず気にかかるのは参照された書簡群の網羅性がさほど高いことである。上述のようにチボーデ旧蔵文書の散逸のため現存が確認された両者の書簡数には顕著な偏りがあるが、筆者が承知する総数40通(ジッド書簡14通、チボーデ書簡26通)のうち、レイマリーはパリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫所蔵以外の書簡はほとんど全て見落としている。またいくつかの明らかな本文転写ミスにくわえ、日付表記が不完全な書簡の年代決定・推定にも誤りや未解決のものが少なくない⁶⁾。そのため議論は時として正確なクロノロジーに立脚せず、失考と呼ばざるをえない記述も見うけられる。

本稿では、『新フランス評論』を創刊し兩次大戦間のフランス文学を主導した大作家と、彼に請われ同誌の常設欄「文学にかんする考察」を四半世紀にわたり担当した大批評家との往復書簡の提示・紹介を第一義とし、あわせてこれの補説をつうじ両者の交流の具体相を実証的に考究したい。

*

ジッドとチボーデの交流が始まったのはまず間違いなく1909年後半のことで、後者の友人であり、当時月刊文芸誌『ラ・ファランジュ』(1906年7月創刊)を主宰していた象徴派系譜の詩人ジャン・ロワイエールの仲立ちによる。

これに先立ちジッドは同年2月、ジャン・シュランベルジェやジャック・コポー、アンリ・ゲオン、アンドレ・リュイテルスらと『新フランス評論』を創刊し(正確にはウージェヌ・モンフォール一派との訣別に続く「再創刊」)、初号から3回連載で『狭き門』を発表していた。また雑誌初出と並行してメルキュール・ド・フランスを版元とする同書の単行出版の準備が進められた。16折限定初版と12折普及版の2種が用意され、アルシュ紙使用の初版300部は6

月 12 日に印刷完了、普及版もその 8 日後には刷り上がる。前者はネルヴァル訳『ファウスト』第 2 版（1835 年）を模した有名な青色の表紙を、いっぽう後者はメルキュールの読者にはお馴染みの薄黄色の表紙を纏ってまもなく刊出した（ちなみに友人・知己に向けた初期の献本では、多くは小型の初版のほうが用いられている⁷⁾。ジッドがロワイエールからチボーデを高く称揚する書簡を受けとるのは、それから程なくのことである。7 月 12 日付のこの書簡はチボーデの経歴を手際よく語り、また何よりも当人の偽りのない感想を伝えているので、長くはなるが関連部分を訳出・引用しておこう――

キュヴェルヴィル〔ジッドの妻マドレーヌ名義のカルヴァドス県の地所〕で 6 月 20 日の『ラ・ファランジュ』最新号をお受け取りのことと思います。〔…〕おそらく今号や初期の号でアルペール・チボーデの驚くべき才能に感嘆なさったことでしょう。このチボーデは非凡にして、人を夢中にさせる男です。20 歳のときにはすでにその著作（うち 2 冊が出版され⁸⁾、他は抽斗に眠っていました）で名を上げていました。しかしそれ以後は何も公にしようとはせず、哲学教師として一年は教壇に立ち⁹⁾、次の年は世界を駆け巡るという生活を始めます。日に 70 キロを歩き、ギリシアと小アジアを訪れています。3 年前に私が『ラ・ファランジュ』のためにノートをいくつか依頼しなかったならば、何も書かないままだったでしょう。このノートは『ギリシアのイメージ』となり、あなたも当誌でお読みいただけたものですが、いずれ単行書として書店に並ぶことになりましょう¹⁰⁾。

チボーデは、あなたやクロードル、パレスとともに当代で最も偉大な散文作家ですが、ごくごく自然な態度として、名誉というものに全く無頓着で、わざわざ書こうという気を起こさないのです。ただ頼まれると拒むということもありません。〔…〕暇にまかせて教科変更のために受けた歴史のアグレガシオンに合格し、現在はアヌシー高校の歴史教授をしています。先日エジプト旅行から帰ったところです。チボーデは『ラ・ファランジュ』最強のメンバーのひとりであり〔…〕実に初々しくも力強い、驚くべき精神の持ち主です。本誌の毎号に、当代作家にかんする彼の評論が掲載されます。6 月号のポール・アダン論はすでにお読みいただいたところ。7 月にはパレス『コレット・ボドッシュ』論をお読みいただけます。さらに 8 月には〔…〕アナートル・フランス論、9 月にはモーラス論、そして 10 月にはご高著『狭き門』にかんする論文です。この論文についてチボーデは私に次のように書いてきました。ご高著は目にするや直ちに彼に送ってしまい、もう私の手元にはないのです。――「今朝受けとったジッドの小型本を（遠出に）持って行きました。お礼を言います。まさに純粋な傑作であり、私の思うに、これに匹敵するものは長らく現れていません。君が話してくれた包括的なジッド論を大喜びで書くことにしましょう。古くから彼の読者だったので、その作品はほとんど持っています。欠けているのは『鎖を離れたプロメテウス』と『ア

ミンタス』、それにくわえ、人に貸して（当然のことに）返ってこなかった『背徳者』だけです。したがってモーラス論に続いて総体的研究を書くにはこの3冊があれば十分でしょう」。

という訳で、ヴァカンスも近いことですし出来るだけ早くこの3冊をアヌシー（アヌシー高校教授）のチボーデ宛にお送り頂きたい。あなたに相応しい、休暇明けの素晴らしい10月号に掲載される論文が如何なるものであるか、篤とご覧あれ。¹¹⁾

ロワイエルからの要請を受けて、ジッドは早速チボーデに『狭き門』を含め計4冊の自著を送る。彼が手紙を添えたか否かは不明だが（後掲書簡の文面から推すに、自筆献辞の入った献本だけだったのではあるまいか）、チボーデは次のような礼状を返した。これが現存の確認された、両者の文通関係を証する最も古い書簡である¹²⁾——

アヌシー、[1909年]7月22日

拝略

感嘆すべきご高著『狭き門』をご恵投たまわり、ありがとうございます。ご本は、内的な生を描いた、今日最も繊細にして深遠なる著作のひとつです。私同様『アンドレ・ワルテル』よりこの方、あなたの作品を愛読してきた者にとっては、なおのことそうです。『ラ・ファランジュ』誌で『手記』から『狭き門』へと至る軌跡を考究するのが楽しみです。あなたが辿られた軌跡はバレスの軌跡と並んで現今最も興味深いものであり、次の休暇の折りにそれをゆっくりと遡ってみるのは、私にとってまさに美しい夏の朝の夢となることでしょう。敬具。

A・チボーデ

追伸。ひとへの貸与で手元に欠けていた『背徳者』『アミンタス』『鎖を離れたプロメテウス』もまた落掌。深謝。

「包括的なジッド論」という意図のもと、『ラ・ファランジュ』10月20日号掲載の『狭き門』評は、先ず『アンドレ・ワルテルの手記』から同作に至る「軌跡」の確認に紙幅の半ばを割く。ジッドは「当代の最も魅力的な3人ないし4人の作家のひとり」であるが、チボーデはこの小説家が各作品で展開してきた「ある部分において二面性を帯びた生と芸術」や、その「極めて内的で生き生きとした倫理的教養」、「繊細で陰翳に通じた驚嘆すべき感受性」にことのほか感じ入る。さらに彼は、ジッドの作品が「重圧や束縛を払い除けるための営為、統一的な生を手にするための営為」であった点を強調したうえで、『狭き門』に——わけても「待機というアリサの本質」の描写に——ひとつの到達点を、

すなわち完璧なまでの「内的な技芸」,「物語を操り挿話を束ね据えつける深遠な技術」を見出すのである¹³⁾。

上掲書簡に続いては、1909年11月6日付ジッド書簡の存在が或る競売カタログ(ジュネーヴ,1969年)に記載されたことがあるが、パリからの発信というものを除けば、記述内容は一切採録されていない。

チボーデは同年7月、アヌシー高校の代用教授から正教授に昇進したが、20代半ばから準備を続けていた博士論文『社会学的見地から考察した「概念」のギリシア哲学』を完成すべく¹⁴⁾、秋から翌年にかけて長期の研究休暇をとり、またこの機会を利用しギリシアを再訪、さらにトルコまで足を延ばした。以下は、帰国直後にジッドに宛てられた書簡――

トゥールニュ、[1910年]6月25日

拝啓

ようやく昨日のこと、アジア・地中海への長旅から戻ってみると、仕事机の上には『放蕩息子の帰宅』が置かれていました。そういう好ましい巡り合わせのおかげで、ご高著は私にとって、まさしく時宜にかなった書物となりました。思うに、あなたはこれほどまでに内奥に迫る、繊細かつ完璧な作品を書かれたことはかつてなかった。これこそは『地の糧』を簡素澄明にし、その生の本質、内的な美を核心にまで還元・純化した作品です。――あなたにかんする、『女性的ロマン主義』流のモーラスの論文を是非読んでみたいものです。あなたを判断するにさいし彼は、その文学通としての感嘆すべき審美眼と、おそらくは同様に感嘆すべきものだが、もはや寄稿者たちの愚劣さを通してしか窺えなくなったその政治的規定方針とのほざまで、どれほど思い悩まねばならぬことでしょうか！ またジュール・ルメートルはあなたに対してどのような考えをもっているのでしょうか(彼の立場は、「ポール・クローデル氏の知遇をうる栄には浴していない」[エミール]ファゲのようなものなののでしょうか)。こう申しあげるのは、あなたの作品がかなり広い領野に及んだ今日、その全体像は我がフランスの精神風土のー典型であると私には見えるからです。17世紀人が実に興味深いかたちで顕現しているように思われるのです。(ご自身はそのことには無頓着で自己陶醉なこともなく、またモーラスやバレスのごとく読者を少々――あるいは大いに――頑なにしてしまうような要素も皆無なだけに、なおのこと然り)。あなたは17世紀人の嗜好と感情を最も自然なかたちで身につけておられる。そしておそらく、かかる感情それ自体ではなく、あなたがこの感情を際立たせ強調なさる点こそは、ひとつにはニーチェが外から再検討してみせた17世紀人の反動的回帰に依るものなのでしょう。

もっとも、この休暇中に是非書くつもりでいる長いジッド論のなかで、今申し上げたことすべてを解きほぐし整理しなくてはなりません。

10月〔の新学期〕にアヌシーに帰ることになるのか、あるいは他のどこかに転任に

なるのか、情報を求め上京の予定です。あなたはその時期の悪天候でパリに留まっておいでかお尋ねすることにいたしましょう。留まっておいでの場合にはご挨拶に伺います。敬具。

A・チボーデ

書簡の主題をなす『放蕩息子の帰宅』の雑誌初出は1907年だが、ここでの謝礼の対象は、1910年1月末「ロクシダン文庫」から刊出し（ただし表紙の刊年表示は1909年）、2月半ば以降ジッドが順次、友人・知己に贈っていた同書の豪華限定版。この大型本は、番号入100部のほかに著者献呈用として無記番の非売品が20部刷られた。批評家の不在中にトゥールニュに送られていたのもその内の一冊である¹⁵⁾。チボーデは遅ればせながら翌7月の『ラ・ファランジュ』誌上で作品を論ずるが、この書評は平明達意の文で物語の本質を的確に捉え、まさに批評家の炯眼と力量を遺憾なく示している¹⁶⁾。たとえば、ジッドによる「福音書のプロテスタント的な転写」を称えた次の一節――

『放蕩息子の帰宅』は福音書寓話を元にした英知と愛情の作だが、この寓話は借用の契機ではなく、それ自体が核なのである。不自然な書き換えもなければ、無理な象徴化もない。読者の心を揺さぶる美、その本質はアンドレ・ジッドの芸術にではなく〔…〕福音書自体に存するのだ。ジッドはラシーヌがエウリピデス対したのと同じ精神、同じ厳密さをもって福音書に誓願する。ジュール・ルメートルが福音書の「余白に」書くのとは異なり¹⁷⁾、福音書のなかに分け入り、そこで人間性を、彼自身の人間性を見いだすのである。私の思うに、ここにこそ人を聖書に向き合わせるプロテスタント的教養の感嘆すべき特性がある。これとは逆に、モーラスや場合によってはルメートルを例として、純粹かつ論理的なカトリシズムがいかに我々を福音書の「余白に」追いやるか、それを示してみるのも興味深いことだろう。

なお、『放蕩息子』の話題につづき短く言及された「休暇中に書く予定の長いジッド論」は、結果的には執筆されずに終わる。おそらくは『パリ評論』1927年8月号に発表される30頁を超す包括的な論文「アンドレ・ジッド」がこの予告の遠い結実ということになろう¹⁸⁾。

上掲書簡の末尾で触れられているように、チボーデはこの年の10月、アヌシーからグルノーブルへ転任となり、1学年度だけではあるが同地で歴史を講ずる。以下は新ポストに着任してまだ日も浅いころのジッド宛書簡（これに先立ちパリで作家との面談が成ったか否かは不詳である）――

グルノーブル、1910年10月23日

拝啓

お手紙が私の元に届かなかったのは当然なことです。トゥルネーという宛先は勘違いなさったため、実際には、あなたがマルセイユに下られるさいにしばしば通過されたことがあるはずのトゥールニュ（ソーヌ＝エ＝ロワール県）だったのです。現在、私はもうアヌシーにはおらず、まだ先のことでしょうが、パリ転任へのおそらく最終段階としてグルノーブルの高等学校で歴史を教えています。

いずれ近いうちに、もう少し長い手紙を差し上げてよろしいでしょうか。その話題とは次のとおりです。私は、入念で遺漏なきようと努めたマラルメにかんする本をほぼ仕上げました。他にこれといった取り柄はなくとも、詩人にかんする単行書としては初めてのものであり、1月には出版の予定です。むろん聖人礼賛書などではありませんが、マラルメに然るべき文学的位置を与えんという意図のもと、強い共感の念を込めて構想されています。そのうえ同書では、創始者に勝るとも劣らずマラルメの領域・ジャンルを導いた思潮や、またこれら思潮のもつ意味合い、いわゆる象徴主義世代におけるその役割を理解・把握させるに最適な作家として、あなたのことも大いに語っているのです。いくつかの点でご教示をお願いし、またご高見に照らし場合によっては変更・修正するために、とりわけマラルメの心理について、いくつか愚見を申し述べてもご不快ではないか、仰っていただけないでしょうか。手紙ではそういった問題には触れぬというごもっともな理由もおありかもしれませんが、まずはお伺いをたててからということにいたします。

正月休暇には必ず上京する予定です。パリでお目にかかり、旧交を暖めさらにいっそうのご厚誼を賜りたく。

グルノーブル高等学校教授 A・チボーデ

ジッドやヴァレリーら「幸福な少数者」の崇敬の対象であったマラルメは、チボーデにとっても青年期から最も愛読した書き手のひとりだった。だが周知のように、その読者層はけっして一般に広がることはなく、チボーデ当人が後年証言するように、詩人の名はこの1910-11年当時すでに、「骨董博物館送りにすべきセナクルの旗印」と同義でさえあった。それだけに、「『ステファヌ・マラルメの詩』にかんする大判400頁もの著書はまさに奇怪な企てだった」のである¹⁹⁾。ひきつづき批評家の言葉を借りていえば、同書執筆にあたってチボーデは、マラルメを「彼自身としてではなく、むしろフランス文学というこの現実の存在、このダイナミックな観念^{イデ}に連なる関数として研究しようと考えた」²⁰⁾。すなわち、バルクソンのアプローチに依りつつ、「シャルル・セニョボス教授から聖人礼賛的方法への疑念を継承した」「ソルボンヌ流の歴史家」として²¹⁾、「己の非力ゆえ」と断りながらも、詩人を「ほとんど非人称的な闇のな

かに」閉じこめておこうとしたのである²²⁾。

上掲書簡で予告していたように、著書の執筆に一応の区切りをつけたチボーデは翌月末、象徴派の総帥にかんする具体的な質問をジッドに書き送る――

グルノーブル、〔1910年〕11月29日

拝啓

数週間来、お手紙を差し上げる機会を何度も引き延ばしておりました。まず始めに、この8月、ちょうど私が一日滞在したポンティニーでお会いできなかったのはなんと残念だったことか！ しかも私はそこから後の行き先がよく分つておらず、ただシトー会の教会を見物しただけに終わったのです。来夏を期すことにいたしましょう。

お話ししていたマラルメにかんする拙著は、推敲作業をのぞき終了しました。このうち2章をロワイエールに送りましたので、『ラ・ファランジュ』の12月号でお読みいただけます。どの点についてご教示をお願いすべきかははっきりさせようと、まさに最後の仕上げを残すばかりの状況に至るのを待っていました。こういった話題では、あなたに対しどれほど遠慮申しあげるべきかは重々承知しておりますので。問題は以下の2点のみです。

第一。私はマラルメの威光に1章を割きましたが、そこでは彼が及ぼした影響の様態を4つ取りあげています。すなわちモークレール、クロードル、あなたジッド、そしてヴァレリーです。モークレールとヴァレリーは、無用な多弁と沈黙との両極に相分かれ、一方は過剰なまでの筆法を推奨し、他方は理に適わぬ筆法を戒める、という点。クロードルにかんしては、そのイマージュの細部や、類推による思考様式、文章の構造。あなたについては、文体にマラルメ的なものが皆無なことから（着想・靈感の面ではむしろ正反対です）、マラルメはじつに微妙で多様な教えによって、あなたが内的な生の矛盾を提示・表現する力添えとなったように思えました。あなたの諸作品のいわば基盤をなす《出口・出ること》という主題は、マラルメがその起源ではないとしても、彼との類縁に由来しているのではないのでしょうか。（もっとも私にとって影響という概念は、主体や人間の状況を整理し把握するための有用な仮説にほかなりませんが）。

この《出口・出ること》という主題が〔マラルメの〕「窓」の主題であるのは言うまでもないところですが、「エロディアード」や「半獣神の午後」〔^{ルネ}統誦（デ・ゼッサントのために）〕、さらには「小屋掛芝居長広舌」の主題でもあるのでしょうか。そうだとすれば、内的な生を詠んだあなたの詩のなかに、マラルメとの近縁を示すこの指標、さらには何か他の指標を識別することは可能なのか、お教えいただけますか。影響にかんするご講演〔『文学における影響について』〕のどこにもマラルメへの言及が見あたらないのに驚いています。この驚きの表明をそのまま残すべきか、すっぱり削ってしまうべきか、あるいはご助言をいただけるなら、それなりの理由を提示して再検討すべきなのでしょう。

第二。マラルメが書いたもので理解できなかったものは一行としてなく、とくに詩

についてはすべてその意図は掴めたと考えています。しかしできれば完全に得心しておきたい点がひとつあります。テオドル・ド・ヴィゼヴァがマラルメにかんする研究ノートを書いており、ヴィットリオ・ピカらはこれに詩の注解を付し自説として援用していますが、私には稚拙でまったく不正確な代物に思われるのです。たとえば、「統誦（デ・ゼッサントのために）」をビザンチンの修道士が語る想像の産物とするなどは、立論として成立しているとは思えません。私の理解では、「統誦」は冒頭から最終行にいたるまで一種の《詩法》なのであり、そこでは詩人が恋人を唯一の聞き手として、最後部に出てくるビザンチン風の背景のように、淡く臆なイロニーのなかで語り続けているのです。書いたものといえはほとんど愚論ばかりのポーランド人ヴィゼヴァの解釈について、マラルメは一度も釈明しなかったのでしょうか。同様に、マラルメが「弟子たち」に「己の詩に込められた千の意味」を明かすのを聞いたと吹聴するベルナル・ラザールの弁を信ずるべきなのでしょうか。マラルメは、いったん詩を書き上げてしまえば、後は心して一切の注釈を差し控えた、そのように私には思われます。間違っているのは私なのか。それともラザールの断言をお人好しの厚顔無恥の故と見るべきなのでしょうか。

申すまでもなく、私のささやかな原稿の東は『新フランス評論』で自由にお使いいただけるものです。もし1月号用にマラルメ論の断章でよろしければ、お知らせください。この8折版の原稿を発送し次第、ただちに今春アテネで執筆したアクロポリスにかんする18折版の清書に取りかかりますが、貴誌からお求めがあれば喜んでその一節をお送りします。

正月には拙著〔マラルメ論〕の印刷のため上京する必要がありますので、まず間違いなくその折りにお目にかかれると存じます。では近いうちにまた。敬具。

A・チボーデ

記述内容の補説として、まずは『ステファヌ・マラルメの詩』出版までの流れを略述しておこう——。チボーデが言うように、同書中の2章、全体のおよそ7分の1が『ラ・ファランジュ』に先行掲載された（ただし12月号と翌年1月号に分載）²³⁾。それと同時に、雑誌を母体とする「ラ・ファランジュ出版」からの単行書近刊が予告される。しかしながら出版計画は以後遅延を重ねた。雑誌裏表紙には、1911年8月号までは「近日常来」、また翌9月号からは「印刷中」と毎号欠かさず記されるが、1912年1月号を最後に予告はぱたりと途絶えてしまうのである²⁴⁾。具体的な経緯は不詳ながら、この時期に「ラ・ファランジュ」に依る計画が頓挫したことはまず間違いない。チボーデからの提案・要請によったのか、あるいはジッドらが積極的に働きかけたのか、これまた委細は不明だが、その後、版元は「新フランス評論出版」（前年5月設立）へと移り、

『ステファヌ・マラルメの詩』（表紙背の刊年表示は1912年、刷了日の奥付記述なし）は1913年1月、『マラルメ詩集』との同時出版というかたちで漸く世に出たのである²⁵⁾。なお、雑誌初出テキストと単行初版の対応箇所とを比較照合してみると、版面の横幅こそ若干異なりはすれ、使用活字や植字の細部・体裁は明らかに同じもので、この実証的事実からは出版社変更後も元の本文組版（ムーズ県バル＝ル＝デュックのコント＝ジャケ印刷所）がそのまま転用されたことが分かる。

マラルメの詩をめぐりチボーデから質問を受けたジッドはどのように応じたのだろうか。3日後（12月2日）の返信はその内容がほとんど知られていないため彼の回答を具体的に知る術はないが、おそらく著者の主張に大きく異を唱えることはなかったろうと推測される。チボーデが「マラルメの威光に割いた1章」（刊本の結論部第1章「マラルメの影響」）では、彼が名を挙げるマラルメ継承者のうち、クロードを除く3人が師から受けた影響が論じられ²⁶⁾、質問相手のジッド本人にかんしては、講演録『文学における影響について』への言及こそ削られたものの、とりわけ最初期の『ナルシス論』（1891年）を挙げてマラルメとの「共鳴」が強調されている――

アンドレ・ジッド氏の〔『ナルシス論』の〕要旨は、たとえ同時代の人々のそれと調和し、また他の誰よりも巧みにノルマンディーの田園の光と水の美しい曲線を描いているにしても、マラルメの論法を典拠とするというより、むしろそれと共鳴しあう点のほうがはるかに多い。マラルメの存在が文学的問題を提起するのに対し、ジッドの存在は倫理的問題を提起する。文学的問題についての瞑想がその形式のみによってマラルメを英雄的な倫理の高みと尊厳に到達させたのに対し、ジッドの場合は倫理的問題への考察が彼の芸術家としての天性を無理なく形成したように思われる。出発点と到達点が互いに入れ代わっているのである。²⁷⁾

また否定的な文脈で名前のあがったテオドール・ド・ヴィゼヴァとヴィットリオ・ビカ、ベルナール・ラザールについては、いずれも註のかたちで、対象文献の出典とともに文面どおりの批判が記されている²⁸⁾。

書簡の冒頭にはスリジー＝ラ＝サル国際コロックの前身、「ポンティニー旬日懇話会」への言及がある。同会は、道徳や社会問題に強い関心を抱き、「道徳的行動のための同盟」（1892年結成、後に「真理のための同盟」と改称）をベースに穏健な運動を続けていたポール・デジャルダンが主宰した文化団体で、毎夏

定例の会場となったヨンヌ県ポンティニーの旧僧院では、いくつか主題が設定され、その名のとおり各々10日間に及ぶ議論・懇談をつうじ知識人の交流が活発におこなわれた。この1910年がまさに初年度に当たるが、とりわけジッドら「新フランス評論」グループは、「現代詩」にかんする第5セッション（9月8-17日）の企画を委ねられるなど、初めからデジャルダンとは緊密な連携関係を結んだ²⁹⁾。書簡にあるようにチボーデは、場所に不案内だったためか、あるいは正確な情報を得ていなかったせいなのか、この記念すべき第1回懇話会に参加する機会を逸してしまった。結局、彼の初参加は翌々年のことになるが、これについては後述。

またチボーデは準備中の自著2冊に言及しながら、各々の断章を『新フランス評論』掲載用にと提案していた。先にも触れたようにジッドの返信の具体的内容は不明だが、次の一節だけはすでに活字化されている——「ご高論『アクロポリス』を私がどれほど心待ちにしていることか（できるだけ早く、断片ではなく完全稿を我々にお委ねください）。いずれかの号の目次にお名前を見いだすのが待ちどおしい」（1910年12月2日付、パリ発信）。マラルメ論抜粋のほうはともかく、アクロポリス論についてはジッドがある程度まとまった分量を依頼したことが分かる。なお、チボーデが期したように翌1911年初頭、両者の面談が成ったか否かは不詳。また1月末ないし2月初めにはジッドがチボーデに手紙を書いたはずであるが³⁰⁾、今日までその所在は確認されていない。あるいは『新フランス評論』3月号に掲載される紀行文「タオルミーナ」に関連するものだったのだろうか。

それからひと月半後、チボーデはジッドからの献本にたいし次のような礼状を返している。書名の記述はないが、ジッドが贈ったのはここ8年来の講演録や論文・書評を取めた『続ブレテクスト』（メルキユール・ド・フランス刊、同年2月3日刷了）である³¹⁾——

グルノーブル、〔1911年〕3月17日

親愛なるジッド

今まで他所でそのつと味わってきた文章を本のかたちで一時に再読した喜びを細々とお伝えすべきでしょうか。あなたはなんと魅力的で、繊細・炯眼なエッセイストであられることか！ こうして纏められたご高著の核をなし、その一貫性を保証しているもの、思うにそれはあなたがすでにお書きになっていたグルモン論と〔アナトル〕フランス論であり、私は両論に照らしてご高著を拝読した次第。あなたは彼らふたり

の作家に抗し、人間的で澁刺とした、響き豊かで輝かしい教養をその限界まで見事に示してくださる。また、あなたが下す文学的判断のほとんどすべては心から私の同意するところです。(園芸家のあなたは植字工に不満を漏らされたのでしょうか。第288頁で、ケフィシアの並木道に植えられているのは〔梨の木 «poirier» ではなく〕胡椒の木 «poivrier» です。そこを通るとき、私はいつも必ずこの木の葉を指に挟んで潰したものです)。

『イザベル』には魅了されました。登場人物のプロフィールを的確に描くそのさりげなさ、繊細な生命が宿り巡る古びた操り人形の博物館、簡潔純粹な文体によって正確に輪郭を示された儂く控え目なフォルムのすべて、それらのご高著を重要な芸術作品たらしめています。この素材の簡素さは『背徳者』『狭き門』にも明らかに認められるもので、そのことによってあなたは真の古典作家となっておられるのです。敬具。

A・チボーデ

記述内容にかんする若干の補説——。誤植が問われているのはヴァレリー・ラルポー『A・O・バルナブス全集』からの引用で、この明白な誤りはチボーデの指摘にもかかわらず、当該の書評「ある裕福な文学愛好者による詩」を再録した NRF 版『ジッド全集』やプレイアド版『批評的エッセー』をはじめ、今日に至るまでいずれの後続版でも未修正のままである³²⁾。また書簡後段が語る『イザベル』は『新フランス評論』の1月号から3月号にかけ連載された、『狭き門』に続くジッドの新作小説。チボーデは5カ月後『ラ・ファランジュ』でこの作品を評するが、そのいくらかなりとも具体的な内容については同書単行本の出版に絡めて後述することにしよう。

『ラ・ファランジュ』掲載のマラルメ論や『狭き門』書評ですでにジッドの高い評価を得ていたチボーデは、上掲書簡と同じ1911年3月、コンスタンチノープルからシチリアを経巡る旅を綴った「タオルミーナ」で『新フランス評論』への初登場を飾る。この「地理的・政治的・^{レシ}美学的考察」³³⁾はチボーデの詩的才能を証し、また後の著書『アクロポリスの^{ホーラ}季節』を予告する文章ではあるが、必ずしも一般の注目を集めたとは言いがたい。彼が批評家として脚光を浴びるのは、なんとと言ってもその2カ月後、同誌に発表したある時事的論文によってであった。まずはこの論文が執筆・掲載された背景から述べておこう。

パリ大学文学部は新世紀初頭から教育体制の大規模で組織的な改革が続けていたが、これにたいする批判は、ペギーやアランら一部の知識人、極右の「アクシオン・フランセーズ」一派をのぞけば、さほど盛り上がりを見せていたわ

けではない。だが1910年を境に事態は大きく動き、「新ソルボンヌ」は広汎な議論の対象となる。とりわけ激しい批判をくり広げたのがアガトンである。アガトンとはアンリ・マシスとアルフレッド・ド・タルドが共作のさいにもちいた筆名だが、両者は週刊紙『ロビニオン』掲載のいくつかの論文でパリ大学文学部の新たな教育方針を、ドイツの影響下、歴史的調査や伝記的・書誌的研究で事足りるとし、フランス的な価値を支えてきた直感や審美眼を蔑ろにするものだと厳しく難じたのである。第1次大戦を前に国際的緊張が次第に高まりゆくなか、論争は文化や政治の次元とも連関していた。そして翌年1月、アガトンの批判論文を纏めた『新ソルボンヌの精神』がメルキュール・ド・フランスから出版されると³⁴⁾、知識人たちの関心・危機意識はさらに高まった。『新フランス評論』もこの機会を逃さず、同書にかんする論評をチボーデに依頼する。ジッドはその意図を3月27日のシュランベルジェ宛書状のなかで簡潔に記している——「チボーデの関心を煽るため彼に一言書き送ります。というのは第一に、アガトンの本は私には重要なものと思われるから。また第二に、[...] アガトンその人自身も『新フランス評論』にとって素晴らしい新規寄稿者になりうるであろうから」³⁵⁾。文面から推すかぎり、チボーデに期待されていたのはアガトンの主張を容れた論評であろう。しかし3日後、彼がジッドに送った返事は意外な内容であった——

グルノーブル、[1911年] 3月30日

親愛なるジッド

ジャン・シュランベルジェが私に論文のかたちで2頁分の原稿を求めています。よろこんで書きたいところですが、残念なことに気懸かりな点がひとつあります。私はアガトンの意見にはほとんど与しないのです。著者が批判している〔ソルボンヌ流の〕^{メソッド}体系は私の精神形成に確かな影響を与えたもので、それゆえ私はこの体系を高く評価し、また影響を受けたことにも満足しているからです。したがって私が書かねばならぬのは全面的な擁護ということになりましょう。だが私には擁護を書きたいという気持ちもなければ書くこともできません。近々ソルボンヌに博士論文を提出予定なので³⁶⁾、私からの擁護は追従と受けとられかねないのです。そういう訳で、お送りするのは急拵えの書評とし、著者名はイニシャルのみ、内容もなるべく自分の考えに合ったものにしておきたいと思えます。言うでもないことですが、あなたご自身、またはどなたか他の寄稿者が執筆を希望され、その論文が好適とご判断なさるならば、お送りする原稿はとりさげますので、もっと内容の充実したもので代替なさるに何らご遠慮はいりません。

聖週間の土曜から土曜〔4月8-15日〕のあいだに校正刷をお送りくださる場合に

はトゥールニュ（ソヌ＝エ＝ロワール県）に宛てていただけますか。復活祭〔4月16日〕の週ということであれば——あなたがパリにおいでの場合ですが——私自身がお宅まで取りにうかがいます。というのも上京の予定があって、あなたにはご挨拶するつもりでおりますので。

アクロポリスにかんする拙著はまだ準備が整っていません。このところマラルメ論、とくに『ラ・ファランジュ』に載せた〔2章のうち〕非常に出来の悪い後の章を完全に書き直すのに懸かりつきりだったのです³⁷⁾。今やそれも終わりましたので、5月はお話した作品の執筆に充てることにいたします。敬具。

A・チボーデ

チボーデがすでに校正刷の送付先を指示していることから明らかなように、書簡には彼の言う「急拵えの書評」が同封されていた（書簡冒頭の記述や時間的なインターバルから見て、おそらくはジッドに先立ちシュランベルジェが具体的な執筆依頼をしていたものと推測される）。ジッドは直ちに原稿をこの盟友に転送し、困惑を吐露しながらも事態の打開策を次のように提案している（3月末日付書簡）——

これがアガトンの著書にかんするチボーデの^{ノート}書評です。困ったことになりました。予感していたように、まさに処刑です。だが興味深い処刑です。そして私が当初アガトンの本に納得していたにせよ、この反駁で私の確信は揺るがずにはおれません。

とはいえ、『新フランス評論』の立場はチボーデよりもむしろアガトンの方に近いだけに、彼を失うことのないようにしたいところです。

そこで私の提案ですが——、チボーデの原稿を論文として掲載する（議論の重要性からして、それだけの価値はあります）、同時に書評欄でもアガトンの本を取りあげる、あるいは少なくとも、書評欄において何行か紹介の文を付したうえで同書から相当量を引用する。³⁸⁾

ジッドの提案はその言葉どおりに実行される。当然のことだがチボーデの同意を得たうえでであろう、「論文」に格上げされた彼の原稿「新ソルボンヌ」は大振りの活字で生まれ、『新フランス評論』5月号において8頁を占めた（著者名はフルネーム）。いっぽう書評欄には、アガトンの「悲観的な厳格さ」と批判者の「過度なまでの楽観論」とのあいだで微妙なバランスを図るべく、前者の主張を汲んだミシェル・アルノー（ジッドの義弟マルセル・ドルーアンの筆名）による一文が配され、それに続いて『新ソルボンヌの精神』から「最も鋭い指摘のいくつか」が引用されたのである。アルノーの危惧を要すれば、現在の高等教

育は秀でた才と堅固な志を有する少数者には恩恵をもたらすであろうが、「良識を備え好奇心もあるが、明確な審美眼や強烈な熱意には欠ける大方の精神」のことは考慮していないのではないか、というものであった³⁹⁾。

では翻って、「凡庸で古臭い旧ソルボンヌ」⁴⁰⁾に抗し、現行の教育体制とそれを支える教授陣（とりわけアガトンが標的としたエミール・デュルケームやギュスターヴ・ランソン、シャルル・セニョボスら）を擁護するチボーデの立場とはどのようなものだったのか。シュランベルジェ宛ジッド書簡が示唆するように、チボーデの考え方は必ずしも『新フランス評論』のそれと一致するわけではない。いや、むしろ相当に遠いものと言うべきだろう。彼によれば、教育上の「最初の手ほどき」とそれ以後の「個々人の業」とは別物であり、そもそも独創性とは伝授の対象ではなく、^{わざ}自ずから学びとられるものである。書誌や分類カードの作成にしても、それが傑作にたいする審美眼を失わせるわけではない。このように述べて独創性への不介入を新体制顕揚の論拠とする点で彼は、マシスへの全面的な同調を拒みソルボンヌ教授陣に相応の評価を与えたパレスとも見解を同じくしていたのである⁴¹⁾。また当時の文化的状況について付言すれば、まさにこの1911年の半ば、ジャン・リシュパンを議長に仰ぎ、アカデミー・フランセーズ会員の大半を擁した知識人同盟「フランス文化のために」が結成された。結果的には、ひと月後にフェルディナン・ブリュノが創設した左派グループ「フランス語と現代文化の友」と対峙することになった組織だが、その幹事を務めたのはマシスとタルドの両名（アガトン！）であり、執行委員・活動委員にはジッドやシュランベルジェ、ジャック・リヴィエールらが名を連ねていた。この一事が象徴するように、『新フランス評論』のメンバーたちのなかで、チボーデは初めからどこか異質な要素を抱える存在だったのである⁴²⁾。

チボーデの手紙は復活祭の休暇中にジッド宅を訪れる場合を想定していたが、後掲書簡の文面から推すかぎり、その時に両者が相見えた蓋然性はむしろ低い。いっぽう翌5月から夏にかけては、文通や面談をつうじ、それなりのやり取りが交わされる。同時期の「新フランス評論出版」設立がその契機のひとつとなったのは間違いあるまい。書簡の提示・紹介を続けるまえに、この単行書出版部門についてごく手短かに触れておこう。

ジッドは『ユリアンの旅・パリュード』再版（1896年）以降、自作の多くを

メルキユール・ド・フランスに委ねてきたが、彼にとって同社は必ずしも居心地のよい版元ではなかった。社主・編集長のアルフレッド・ヴァレット（閩秀作家ラシルドはその妻である）とは厚い信頼関係にあったものの、グループの大立者レミ・ド・ゲールモンやその取り巻きらと文学的な嗜好・信条が今ひとつ合わなかったのである。『新フランス評論』創刊の背景にはそういった事情が少なからず関係していたわけだが、新雑誌が軌道に乗るにつれ、創刊メンバーのあいだから自然な成り行きとして単行書出版部門の設立が話題に上ってきた。かくしてこの年の5月末、ジッドとシュランベルジュ、ガストン・ガリマールの3者均等出資で「新フランス評論出版」が正式に発足する。その門出を飾るべく翌6月、クロード『人質』、ジッド『イザベル』、そしてシャルル＝ルイ・フィリップ『母と子』の3冊が立て続けに刊行される。このうち『イザベル』について付言すれば、刊本は16折小型の豪華紙限定初版（500部）と12折普及版との2種が準備されたが、5月29日刷了の前者には誤植にくわえ、数頁に行数の不揃いが見つかったため、そのほとんど全冊がジッドの指示により廃棄された⁴³⁾。その後、組版を再調整した所謂「第2初版」の印刷は結局、普及版のそれと同じ6月20日まで延期され、これにともないジッドの献本も7月初め以降となったのである（当初の献本の多くは豪華版の方）。

さて、次のジッド宛チボーデ書簡はまさに「新フランス評論出版」設立時のもので、前段の記述からは件のアクロポリス論がすでに同社の単行書刊行プログラムに組み入れられていることが分かる（また後段の語る「旬日懇話会」にチボーデが初参加するのはこの翌年のこと）――

1911年6月3日

親愛なるジッド

残念ながら、お約束していた原稿を延期しなければなりません。というのもこの数カ月、他のいくつかの仕事で手一杯だったのです。アクロポリスにかんする拙著は今度の休暇までには準備が整いそうもありません。もちろん断片稿として出版できる部分が『新フランス評論』用であることに変わりはありません。

復活祭の休暇中に、あなたが送ってくださったポンティニーのパンフレットを拝受いたしました。今年もまた、懇話会のどれかひとつに参加の申し込みをさせていただくことになるのか否か、今のところはまだ分かりません。というのも、その時期の予定をどのようにするかまだ決めていないからです。この件については、決まり次第お手紙を差し上げます。敬具。

A・チボーデ

同じ6月、チボーデはパリのジッド宅ヴィラ・モンモランシーで、初対面のシャルル・デュ・ボスを交え、アガトンを主題に意見交換をしたらしい⁴⁴⁾。残念ながら会談の詳細は不明であるが、「新フランス評論出版」や彼のアクロポリス論なども話題に上ったであろうことは想像に難くない。

すでに述べたように、『イザベル』限定版の印刷完了は、初刷の不備のため同月末まで遅延した。刊出を今か今かと待ちわびていたジッドは7月初め、滞在中のキュヴェルヴィルに著者献呈用が届くや、早速これに自筆の献辞を添えて友人・知己に贈っている（現在までに確認された献本の多くが7月3日付）。贈呈者のなかには当然チボーデも入っていたはずで、じじつ彼は『ラ・ファランジュ』の翌月号でジッドのこの新作を論評している⁴⁵⁾。その一節を引こう――

ジッドにとって倫理的な生とは対立から成るものであるが、彼はその対立を理論家として和解させようとはせず、逆に芸術家の立場でこれを純化し強調する。

この技はいつその深まりを見せ、『ユリアンの旅』や『バリュード』『地の糧』のアラベスク模様は、最近作において、夜のフランス風庭園の美しい輪郭のごとき端正さ、しなやかさ、甘美さを備えるに至った。アンドレ・ジッドの物語は、語りの技を支える最良の伝統に連なっている。『イザベル』はしばしばメリメの作品を喚起するが、それほどには鮮明かつ具象的なものでなく、もっと控え目で、文章の律動への配慮がより強く窺われる。『イザベル』の登場人物がさほど生き生きとは描かれていないにせよ、小説の色調が均整のとれたものであることに変わりはない。著者は実に的確に、これら古のタピスリーいにしよの人物たちに必要な生命と次元とを配合しているのだ。

チボーデは、パリでジッドと面談後まもなく夏の休暇に入り、しばらく山間部ですごした後、故郷のトゥールニュに戻り、任地グルノーブルから転送されていたジッドの手紙に急ぎ返事を書いている――

トゥールニュ、[1911年] 7月26日

親愛なるジッド

申し訳ありません。お手紙がグルノーブルに届いたとき、折悪しく山中におり、ようやくそれを拝見したのはトゥールニュに戻ってからのことだったのです。アクロポリスにかんする例の拙著は依然として纏まっておりません。完成のあかつきにはその旨をお知らせし、ご相談のうえで『新フランス評論』にとって然るべき方策を考えることにいたしましょう。さしあたっては、ポール・アダン著『見知らぬ街』の出版を機に、9月号用として何か総括的な批評論文をお望みでしょうか。仮にご希望の場合には、いつ、どこに原稿をお送りすればよろしいでしょうか。敬具。

A・チボーデ

アクロポリス論の執筆・完成はひきつづき遅れている。これに代わり取りあえずの寄稿としてチボーデが提案したポール・アダンの新作小説『見知らぬ街』（P・オーレンドルフ社刊）の書評は、結果的には『新フランス評論』ではなく『ラ・ファランジュ』8月20日号に、上述の『イザベル』書評と併せ、両作品の比較研究として発表される⁴⁶⁾。掲載誌変更の理由をミシェル・レイマリーは「ジッドからの返答がなかったため」と述べているが⁴⁷⁾、この時期のジッド書簡の大半が保存されていないことを思えば、返信がなかったとは言い切れない。いや、むしろ逆の場合のほうが蓋然性ははるかに高かろう。あくまで推測の域を出ないが、掲載媒体の変更はむしろ、仲間うちの作品は論評しない『新フランス評論』の原則と、その『イザベル』に絡めて『見知らぬ街』を論じようというチボーデ自身の新たな考えとが相俟った結果なのではあるまいか。

同年夏、チボーデはグルノーブルでの歴史教師の任を離れ、ふたたび長期休暇に入る。この休暇は主に翌年初めからの長旅を念頭に置いたものであったが、彼は年が明けた1月半ば、次のような返書をジッドに送っている（この場合も文通者の先行書簡は保存されておらず）――

トゥールニュ、〔1912年〕1月16日

拝略

今日になってようやく12日付のお手紙をトゥールニュで拝見しました。しばらく北部にいた後、パリで丸2日すごし、それまで何度も機会を逸していたヴァレリーに会いに行ったところでした。お手紙を落掌していたなら、あなたにお目にかかり、そういったことなどあれこれを直接お話できたのですが。

私同様あなたも確信しておられるように、『新フランス評論』のためには、何とかしてミシェル・アルノーが問題の欄を担当するほうがずっと好い策でしょう。彼には節度や冷静、明晰といった理想的批評家に必須の資質が備わっています。しかし無論のこと、彼に時間の余裕がまったくないときには、継続的にであれ不規則にであれ、ご下命に応じさせていただきます。常設欄、単発論文の如何にかかわらず、アンドレ・バルなる人物の博士論文にかんし、よろこんで批評文を執筆いたしましょう。同者の著作で機会あって私が読んだものから予測するに、さほど秀逸な論文ではないと思われませんが。〔この件にかんし〕ジャン・シュランベルジェに手紙を書きます。

トゥールニュには一晩泊まるだけで、明日には汽車と船を乗り継ぎエジプトに向かいます。カイロでひと月、ついでエルサレムとアテネでひと月ずつ過ごし、4月に帰国します。アクロポリスにかんする拙稿を持参し、それを彼の地の岩の上にじかに置いて清書することにいたします。敬具。

A・チボーデ

チボーデがヴァレリーに初めて接触したのは丁度1年前のことで、ジッドにたいし行ったのと同様、マラルメの影響について一連の質問を書き送り、次いで詩人からの返信を自著で引用することの許可を請うていた⁴⁸⁾。

またミシェル・アルノーにかんしては、高等師範学校首席入学、哲学アグレガシオン首席合格など輝かしい経歴の持ち主であったが、『新フランス評論』共同創刊者のひとりとしてはグループの期待に十分応えたとは言いがたい。たしかに同誌創刊当初は毎号のように評論・書評を発表するも、1910年秋以降その頻度は急速に減じていた。そして上掲書簡の3週間ほど前、ジッドは文学関係の「クロニック」を委ねるべく彼と長い会話を交わすが、叱咤激励をまじえた説得もまったくの無駄に終わってしまう。シュランベルジェの表現を借りれば、ジッドの義弟は「多くの期待・希望が掛かっていたこの《ミシェル・アルノー》を徐々に文学生活から消し去ろう」とする「意志欠落の病」に冒されていたのである⁴⁹⁾。したがってアルノーの立場に配慮したチボーデの返答にもかかわらず、やがて彼が常設の文学欄を担うことは、この時点ですでにある程度想定事項であったと見て差し支えない。じっさい、アンドレ・パールの博士論文「象徴主義論」にかんするチボーデの書評原稿を読んだジッドは2月21日、シュランベルジェに宛て次のように書いている――

教えてください。チボーデについてはどのように決まったのでしょうか。また彼の現在の居所はどこでしょうか。というわけで〔アルノー〕の毎号定期のクロニックはもうすっぱりと諦め、今後当人がその時々で我々に供しうるものを論文として採ることにしましょう。いっぼうチボーデのこの最初のクロニックは実に満足しうる内容だけに、けっして彼を手放すことのないようにしましょう。あなたもそうお望みではありませんか。今の執筆陣では一連の重要な著作について、黙して語らずか、あるいは誰彼の見境もなく論評を任せるほかないのにたいし、評者として彼を当てにできると思えば、我々としても随分と気が楽になります。⁵⁰⁾

そして『新フランス評論』3月号に掲載されたこの書評を皮切りに⁵¹⁾、チボーデの評論・書評（当初は「クロニック」中の「文学」、1914年4月号からは独立した担当欄「文学にかんする考察」）は、彼の没する1936年まで四半世紀にわたり、ほとんど毎号誌面を飾ることになるのである⁵²⁾。

予定どおりエジプト、エルサレム、アテネを歴訪後、フィレンツェにも立ち寄り春先に帰国したチボーデは、この年、初めてポンティニーの「旬日懇話会」

に参加する。8月下旬同地に滞在し、第3セッション「芸術と詩——小説について」(8月21-30日)に出席したが、「やや雑多な人たちが集まった」⁵³⁾この10日間(主な参加者は、同会主宰のデジャルダンのほかに、ジッド、コポー、ゲオン、アルノー、フランソワ・ヴィエレ=グリファン、カミーユ・ヴェタール、エドモンド・ゴスなど)、彼が積極的に議論に加わることはなかった。しかしながら、ややもすると過密なプログラムに沿って研究発表と討論がくり返され、事後に分厚い報告書が出版される今日のスリジーのコロックとは違い、発表は午後にとつのみ、それ以外の時間は周辺の散策や図書室での読書、そしてなによりも自由な歓談に費やされたポンティニーであるだけに、チボーデが機会を捉えては他の参会者たちと活発に意見を交わし合ったことは疑えない⁵⁴⁾。

ヴァカンスが明けるとチボーデはブザンソンのヴィクトル・ユゴー高校教授に着任、結果的には1年だけであったが同校で歴史を講ずる⁵⁵⁾。翌年1月『マラルメの詩』が漸く刊出することはすでに述べたが、次の書簡はそれと同時期のジッド宛で、献本にたいする礼状。チボーデに贈られたのは、作家が「トレテ」と呼ぶ旧作6点を収めた合本である(『放蕩息子の帰宅』を総題に冠した同書の刷了は1912年2月8日、ただし実際の発行は13年1月末)⁵⁶⁾——

[1913年2月]

親愛なるジッド

ご丁寧なお手紙とご高著をありがとうございました。ご高著では、実にさまざまな時期に大いに感じ入ったところをすべて再読させていただきました。『愛の試み』から『放蕩息子の帰宅』に至るまで、貴作品のなんと美しい軌跡、なんと華麗な要約であることか!『放蕩息子』については、最初に覚えた至極大きな感銘をこの度もただただ再確認するばかりであります。

正月にパリでお会いすることができず残念でした。私としてはお目にかかるつもりでしたが、コポーの言うところではロンドンにおいでだったとか。3月末に一言さし上げて、いつならば午後にヴィラ・モンモランシーのご自宅に伺えるかお尋ねいたします。それまでには私の『アクロポリスの季節』を受けとっておられるでしょう。拙著をお読みになって、いつか春のアテネで私と会おうという気になられるならば、その最大の目的はすでに達せられたと申せましょう。敬具。

[A・チボーデ]⁵⁷⁾

書簡後段にあるように、ジッドは前年12月上旬からこの1月初旬までロンドンに滞在した。前々年の夏に続く英国訪問だったが、このたびはエドモンド・ゴ

スとの再会が主な目的で、ジッドは批評家と旧交を温め、さらに年の瀬には2度にわたり招かれた同者宅の夕食でヘンリー・ジェイムズ、次いでアイルランド人作家ジョージ・ムーアとも知り合っている。

その後1913年3月には、チボーデ2冊目の著書『アクロポリスの季節』（2月13日刷了）が漸く「新フランス評論出版」から刊出した。「アクロポリスを見知った日から私は秩序を選び、その選択を強固なものにするためにこの本を書いた」——芸術と美、秩序と規律に敏感な批評家は、迷うことなくそう言い切っている⁵⁸⁾。秩序への志向という点でチボーデの考えはモースのそれと強く共鳴し合う。新作はまさに後者の旅行記『アンティネア』（1901年初版）への応答と呼んで差し支えない。またそこには「タオルミーナ」の甘美な詩情と、『ギリシアのイメージ』の鋭利な批評とが見事に混ざり合い、この著者ならではの二面性がはっきりと見てとれる。なお、上掲書簡が予告するように、仮にチボーデが3月末に上京していたとしても、ジッドとの面会は成らなかった可能性が高い。作家は同月27日にはパリを離れ、トゥールーズ、ル・ラヴァンドゥなど南仏を経由して4月初めにフィレンツェに到着、以後5月中旬までシエナ、ローマ、ヴェニスとイタリア各地を訪れていたからである。

この学年度が終わるとチボーデはまたもや研究休暇を申請し、機会を捉えてギリシアを訪問する。いっぽうジッドは11月22日、ヴィユー＝コロンビエ座で「ヴェルレーヌとマラルメ」と題する講演を行ったが、話も半ばに差しかかると『ステファヌ・マラルメの詩』の一節を読み上げた後、著者の炯眼をまさに手放しで賞賛している——「私がこの本を開いたのはほとんど間違いでした。というのは、それを閉じるのは今や困難極まりないことになったからです。まさにチボーデ氏は「…」マラルメについて語るべき重要なことはすべて述べているのです。これは巨匠の作品への序文、不可欠な注釈であり、そこでは最も緊急な美学的問いのいくつかがすでに提示されています。近ごろ同書を再読して私は、諸君が先ほど朗読をお聴きになったあれこれの詩について自分がもたらしうる注解〔の乏しさ・凡庸さ〕に意気阻喪するばかりです」⁵⁹⁾。

*

これ以降、第1次大戦を跨いで7年間、両者の文通はほとんど確認されてい

ない。わずかに1914年2月11日付ジャック・リヴィエール宛のなかにジッドがチボーデに向けて書いた短信への言及が見出されるだけである⁶⁰⁾。また当該期間中、既刊・未刊を問わず現存する他のジッド書簡に批評家の名が現れることは実質的に皆無。『日記』においても関連記述はゼロである。

作家の個人史としては、数年来執筆を続けていた『法王庁の抜け穴』の完成・出版(『新フランス評論』1914年1-4月号に連載、2冊組初版は4月刊出)、戦争勃発にともない同誌休刊を決定後、10月から1916年春にかけて文字通り挺身したベルギーからの避難民救済の活動、続いてマルク・アレグレ青年との恋愛とそれに起因する夫婦関係の険悪化(そこから生まれたのが『田園交響楽』であることは言わずもがな)など、いくつかの重要事が挙げられるが、いずれも周知の事柄であるので、ここでは簡略ながら戦中・戦後のチボーデについて述べておこう。

1914年8月16日、チボーデは40歳で応召、陸軍第60連隊に伍長として配属される。次いで、前月歴史学教授に任ぜられていたクレルモン＝フェランの高校で数週間だけ教鞭を執った後、所属中隊とともにソーヌ＝エ＝ロワール県フラセ＝レ＝マコンに宿営。翌年秋には攻撃部隊員として第260歩兵連隊に転属となり、1916年にかけて数週間、ピカルディー地方オワーズ県で最前線に立つ。同年4月からは、道路の保全や仮宿舎の警備といった前線援護に従事したが、任務自体はかなり閑暇のあるものだったため、空き時間を活用して『フランス生命の30年』3部作(1920-23年)や『トゥキディデイスとの遠征』(1922年)の一部、長編叙事詩「ペローナの羊飼い」(未刊)の執筆に励み、また「戦時の手帖」(大半が未刊)を付けている。この間^{かん}しばしば後衛部隊への配置換えを薦められたが、いずれも固辞したらしい。1919年1月、動員解除。郷里トゥールニュに近い土地としてディジョンへの赴任を申請するも叶わず、代替のポストとしてイギリスに渡りヨーク大学の臨時講師をしばらく務めた。またこれを機に創刊間もない月刊文芸誌『ザ・ロンドン・マーキュリー』に、「フランスからの手紙」と題する挿話的論文をいくつか寄稿している⁶¹⁾。

1919年6月、ヴィユー・コロンビエ座の演劇活動に専念するコポーに代えて、リヴィエールの編集で『新フランス評論』が復刊される。ジッドは論文「ドイツにかんする考察」と、新編集長およびコクトーへの公開書簡を載せたが、チボーデも早速自身の常設欄「文学にかんする考察」を再開している。初回掲載

分で批評家を取りあげたのは当然のことながら「戦時中の小説」であった⁶²⁾。翌7月には、単行書発行部門「新フランス評論出版」が株式会社「ガリマール書店」へと正式に移行し、やがて同社は「王朝」とも称される大出版社へと成長・発展を遂げてゆく。その表舞台には立たなくとも、誰もが幕の後ろに控えるジッドの存在を意識し、兩次大戦間をつうじ、この「最重要の同時代人」⁶³⁾の一挙手一投足に注目したのは周知のとおりである。

チボーデは同年秋、ジッドの薦めもあり、外務省の囑託としてスウェーデン・ウプサラ大学のフランス文学講師に着任する。次の書簡は赴任数カ月後のジッド宛返信（残存書簡は少数だが、戦争終結・雑誌再刊を機に両者の文通が確実に復活していたことが分かる）――

ウプサラ、[1920年] 2月29日

親愛なるジッド

本日拝受したお手紙に最初は驚きました。しかし5分もすると、この驚きは、お手紙のような率直・誠実な質問がけっして紋切り型ではなく、とかく目にしがちな文学的な体裁を取り繕ったものでもないことに依るので分かりました。よく考えさえすれば、ご質問がきわめて自然なものであるのは一目瞭然です。これを作者の虚栄と取らないでほしいと望まれておいでですが、ご心配なさるには及びません。虚栄とはまさに、疑問を胸に抱きながら言葉に出さぬこと、愚か者の目に滑稽と映るのを怖れて口にせず、心のなかで苦い煩悶のうちにあれやこれやと思い悩んで密かに疑問を燻らせることです。率直なお話ぶりは、あなたが作品のなかに注がれる人間としての、また芸術家としての率直さの延長に他なりません。私はそのいずれの率直さも同じ理由でひとしく愛さずにはおれません。

ご質問にある明確な論点についてははっきりとお答えできます。仮にバルザック小説論を書いたにしても『感情教育』について語ろうとはおそらく考えもしなかったのと同じ理由で、あるいはじっさいイギリスの冒険小説を扱ったさいにチェスタンのどの小説にも触れなかったのと同じ理由で、私はいわゆる「冒険小説」にかんする論文では『抜け穴』については語りませんでした。冒険小説群、この呼称が含意する領域とは、[チェスタンの]『木曜日の男』も、また同様に『法王庁の抜け穴』も共に排除するもののように思われたのです。というのは、そのいずれも冒険小説を超えた知性と諧謔に富む世界に属しているからです。じじつ両作品は神話なのです。ギリシア人にとっての冒険小説を論ずるならば、たしかにルキアノスの『本当の話』までは話題を広げねばならないでしょうが、しかしプラトン〔『国家』第10巻〕が語るアルメニオスの子エルの旅にまで言及するという考えは私には起きなかったでしょう。おそらく私は間違っているのでしょうか。なぜなら、実際のところ『ユリアンの旅』のような観念的な冒険小説には言及しましたし、またその気になれば『法王庁の抜け

穴』や『木曜日の男』にまで話題を広げることはできたのですから。しかしそれでは〔冒険小説の〕境界が不明確であるだけに、核心からは少々離れてしまうと感じたのです。

お手紙の主題をなしている個別点を包摂するさらに一般的な問題について、ご確信いただきたいのは、私が『法王庁の抜け穴』をあなたの著作のなかでも最も活気に溢れた大胆な作品と考えているということです。私がこの作品を初めて「発見」したのは、戦時のある休暇中に再読したときのことでした。最初に読んだときは、不安で落ち着かぬ印象を覚えたものでしたが、それは大方の読者の印象でもありました。風刺の不気味な荒々しさ（『ブヴァールとペキュシェ』、ミルポー、ドーミエのごとき）が大多数の読者をひどく困惑させ、じじつ我ら人間の哀れな本性に向かって敵意ある抜け穴を進むがごとき印象を強く抱かせ、いっぼう陽光と人間性の光明は遙か果てにし見えぬ。そのため、この『抜け穴』は長い間ずっと、『危険な関係』や『ブヴァール』のように邪悪な精神に憑かれた作品という世評に包まれ、異端の匂いを放ちつづけます。次いでようやく呪いが解け、陽光と知性が到来するのです……。私としては構成に若干の留保はあるものの、この作品のあるがままを愛しています。たしかに私には今まで同書について語る機会がありませんでした。あなたから伺ったことがある〔仲間褒めはしないという〕かつての禁令に縛られているとは思いますが、私が『新フランス評論』であなたを話題にするときは、控え目に軽く仄めかす程度にとどめています。しかしまさに遠からず説明・解釈の機会が与えられることでしょう。

デファイユが、私の序文を付したあなたの「選文集」をスウェーデンで出版する計画についてお伝えしたことと思います。あなたがご希望ならば、喜んで序文を書きます。しかし、なぜスウェーデン語版と同時に、フランス語版や英語版を出さないのでしょうか。このこと全般についてご意見をお聞かせいただければ幸いです。お考えを伺うまでは一切取りかからぬ所存。

『田園交響楽』を熟読玩味しました。現時点では最初の読後感に変わりありませんが、あえて申しあげれば、再読のさいも同じ印象を抱くかは分かりません。もう50ページほど書き込んであれば（あなたの作品のばあい、量が多すぎると読者が嘆くことなどありえません）、ジェルトリユードの『時間の流れ』をふっくらと緩やかなものにし、そのどこか性急でぎくしゃくしたところをなくすのに大いに有効だったでしょう。また同じ理由から、彼女の設定にしても、牧師が無邪気に自宅に連れ帰るシラミだらけの奇妙な生き物ではなく、初めから一般家庭出身のありふれた盲目の少女としたほうがよかったのではないのでしょうか。物語のテンポの速さは『野生の少女』（フランソワ・ド・キュレルの劇作）を思わせますが、こちらのほうはまさに単純明快な筋立てという芝居の決まり事のおかげで難を逃れているのです……。付言すれば、一般の読者があれこれと推測しなくても済むよう、若い主人公たちがカトリックへと回心する理由についても、あと5、6ページ欲しいところです。

スウェーデンではとても快適にすごしています。ウプサラは心休まる健康な土地柄で、ものを考えるには打って付けの環境です。数カ月過ごすだけのつもりでやって来

ましたが、来年度も戻ってきます。あなたのご指示も与って赴任しただけにいっそう当地は愛しいものとなるでしょう。ただ思い出すところでは、仲立ちを務めたプロテスト神学部長の子息ヴォーシェ氏はあなたのお名前を口にはしましたが、その話しぶりはどうも曖昧で、デフーイユは私がスウェーデンに来るか否か、私に手紙を書いてもよいか否かをあなたに尋ねただけだ、そう言っているかのようでした。しかしそれは大したことではありません。あなたがこの度もまた、私にたいし関心と友愛をお示しくくださったことこそが大切なのですから。親愛なるジッド、あなたにたいする私の心情もまたなんら変わらないことをお信じください。これまで4半世紀、私はあなたの作品を愛読しつづけ、あなたと共に生きてまいりました。私にはいつも、『新フランス評論』への我々の協働がひとつの運命的な軌跡を知的かつ完璧なかたちで描いてきたように思われていました。まさにその運命的な軌跡がゆえに私は長い間、あなたに共感しつづけてきたのです。

またお手紙は、『新フランス評論』をめぐる我々の関係をさらに固め、かつその精神や進むべき方向、依って立つべき位置についていっそう理解し合う必要を改めて示しています。シュランベルジェやドルーアン、リヴィエール、ゲオンら共々、是非にも今夏ゆっくりお目にかからねばなりません。忙しいバリ滞在時の偶さかの会話ではさして実り多いものとはなりそうもありませんから、ポンティニーのいづれかのセッションがその機会となるとよいでしょうね。さて、どうなりますやら。どうか私の無沙汰を我々の精神的友情を損ないかねぬものとお考えくださらぬように。この無沙汰は、ひとつには無頓着ゆえであり、またとりわけ、いくぶん非社会的な自主性と、他者の自主性への配慮ゆえなのです。しかし外見はどうであろうとも、あなたにたいする私の親愛の念をどうかお信じくださいますように。

ウプサラ大学講師 Alb・チボーデ

長い手紙なので、段落単位で内容の補説をしてゆこう。まずは「冒険小説」に関連した第1段落から第3段落まで——。「冒険小説」は同時代文学史において大きな射程を有する問題であるが、書簡の議論に範囲を絞れば、その背景には作家の創作上の要請と、「新フランス評論」グループのある程度集合的な関心とがあった。前者から述べると、第1次大戦勃発までの数年間、ジッドにとって最重要の課題は、一刻も早く『法王庁の抜け穴』を完成・上梓することであった。作品の着想は遠く1893年頃にまで遡るが、物語の大筋が漸く固まりはじめたのは1905年のこと。『狭き門』執筆の大幅な遅れもあって、以後も仕事は思うようには捗っていなかったのである。停滞を打破し、この新たな小説に必須のピカレスクな広がり、「レシ」作品群とは異なる自由奔放な文体を探るべく、ジッドが範を求めたのがデフォーやフィールディング、スウィフトらで、1910

年の本格的な英語学習の開始につづき、『ロビンソン・クルーソー』を、次いで『トム・ジョーンズ』『ガリヴァー旅行記』を「生肉を嚙るように」貪り読んでいる。後年の回想によれば、その後も「数年間はほとんど英語しか読まなかった」ほどであった⁶⁴。こうした読書体験から作家の小説観が変容・形成され、またそこに由来して、自作『抜け穴』が「冒険小説」の系譜に連なるという意識も生まれていたのである。いっぽうジッドの影響を受けて「新フランス評論」グループのなかでも論議は活発化する。その最大の成果がジャック・リヴィエールの論考「冒険小説」（1913年5-7月号に連載）である。彼によれば、「未来と未知なものに向かって自らを開く精神」が待望したのが、従来のフランス文学にはない「冒険小説」だった。リヴィエールの主張には古典主義的文学観を脱し切れていない面もあるが、「作品が進む方向は初めからすっかり決まっているわけではない。それは作品が成長するにしたがい変わっていく。けっして過去が現在を説明するのではない、現在が過去を説明するのだ」、あるいは、冒険小説のなかで「我々は無限の可能性の宝庫を前にしている。我々は時間と生命の運動に全身全霊を委ねるのだ」など、そこに盛られた提言はたしかに新たなロマネスクを体系化していた⁶⁵。

チボーデも『新フランス評論』でこの問題を扱った。1919年9月号掲載の論文「冒険小説」において、イギリスの冒険小説の系譜を素描し、フランスのそれとしては大戦勃発の前年に出版されたアラン＝フルニエの『グラン・モーヌ』をとりわけ高く評価したのである。なお、ジッド作品にかんしては『ユリアンの旅』『パリュード』に言及するも、『抜け穴』は挙げていない⁶⁶。これに対しジッドは自らの見解にもとづき疑問点を書き送っていたはずだが、チボーデの返信は、若干の留保表明に窺われるように、さほど厳密にジャンルの領域を画定しているわけではない。『抜け穴』除外の理由にもいささか明瞭さの欠けるところがある。だが続けて断言するように、批評家がこの作品を高く評価していたことは疑えまい。じじつ後年の遺作『フランス文学史』（1936年）のなかでは、「冒険小説」（ピエール・ブノワやピエール・マッコラン、ルイ・シャドウルヌらの「すぐに時代遅れとなった事件小説」）を語るに先立ち、別途「冒険家の小説」を立項し、『抜け穴』が不完全な冒険小説であることを示唆しながらも、その「内的小説」としての先駆性を称揚することになる——「この小説は、多少とも滑稽味を帯びた、大いに成功しているとはいいがたい冒険小説と、それ

と同じものではない冒険の小説、すなわち今日から見れば驚くほど明敏な冒険家の小説という2つの要素の識別を可能にする。なぜならジッドは精神的父として、来るべき世代の青年、とりわけ若き文学者の特徴をラフカディオという人物のなかに予め描いていたからである」⁶⁷⁾。

ちなみに、問題に関連して書簡に名前の挙がった作家のうちバルザックについては、チボーデは未だ同者を纏まったかたちで論じたことがない。それゆえ「バルザック小説論では『感情教育』を絡める考えはない」というのはあくまで仮定の話であったが、じっさい、この作家を軸に据えた5年後の考察「フランスの批評とドイツの批評」には『感情教育』はむろんのこと、その著者への言及はいっさい見当たらない⁶⁸⁾。(両文通者のフローベール評については、20年代後半に彼らが力を込めて語るところなので、当該の書簡を紹介するさいに詳述)。また同じ文脈で触れられたイギリスの冒険小説を扱った文章とは上述論文「冒険小説」の相当部分を指す。そこではトマス・モアやデフォー、H・G・ウェルズらの作品は挙がるが、チボーデの言うとおりに、チェスタトンのそれは一度も引かれていない。

第3段落末尾の「私が『新フランス評論』であなたを話題にするときは、控え目に軽く灰めかす程度にとどめている」というのはまさにその通りで、この時までにはチボーデがジッドや彼の著作に言及したのは僅か4号にすぎず、またそのいずれもがごく短い引例としてである。本格的な論考は7カ月後に掲載される『田園交響楽』の書評を俟たねばならない。

次いで第4・第6段落が語るチボーデのスウェーデン滞在に関連して――。まず両段落に名前の挙がる「デフーイユ」とは、瑞仏辞書やスウェーデン語文法書の編纂で知られるポール・デフーイユ(1866-1943年)のこと。経緯は不詳だが、彼がチボーデとともに企画したスウェーデン語版ジッド選集は結果的には実現に至らなかった⁶⁹⁾。文通者がその意義を示唆する「フランス語版や英語版の選文集」については、書簡記述との関わりは不明ながら、この翌年クレス社「青春文庫」からフランス語版が上梓されることを付言しておこう⁷⁰⁾。また第6段落に述べるようにチボーデはウプサラでの生活をことのほか気に入る、休暇での一時帰国を挟みながらも結局は同地に3年間(6学期)留まることになる。大学ではフランス語や翻訳法などを教えたほか、学期毎に特定のテーマを定め講演を行った。その題目を列挙すれば、1919年秋学期はモンテー

ニュ、20年春学期はフローベール、次の1年間はコルネイユとラシーヌ、そして最終年度はモリエールとフランスの文学批評であった⁷¹⁾。学外の活動としては、雑誌『フォーラム』にフランス文学にかんする論文数点を発表、またストックホルムの日刊紙『ダーゲンス・ニューヘテル』の定期的な寄稿者にもなっている(1922年2月からフランス帰国後の24年12月まで毎月1点の割合で論文を掲載)。

第5段落の話題である『田園交響楽』は前年の10-11月、『新フランス評論』に2回に分けて掲載され、これと並行して単行版が準備される。しかし同版は、刷了記述こそ12月15日と打たれているものの、実際の刊出は1920年晩春まで遅れた。ジッドとしては最初の組み付け(19×13センチ)が気に入らず、当該刷りをほとんど全て廃棄、別サイズ(17×11センチ)に調整直させたためである⁷²⁾。したがってチボーデが伝える感想は雑誌初出テキストを読んだのもということになる。その後、初版が完成すると彼にも1部が献じられたはずで、同年10月の「文学にかんする考察」はジッドの新著を取りあげている。常連載筆者の作品は扱わないという雑誌創刊当時の原則はやや緩和され、論評の対象とする例が出始めていたが、『田園交響楽』の場合もそのひとつであった。この書評でチボーデは、手紙で述べていたように初めは「物語の濃さ・短さに少々戸惑いはした」ものの、「ジッドが率直に図式化・簡潔化を選んだのは正しい決定であった」と見解を修正する。次いで、盲人が別の盲人に導かれ、ふたりして陥穽におちいる点に『狭き門』との相同を認めつつ、『田園交響楽』の場合は「真の盲人たる牧師」が「広き門」より入るがゆえの過ち、と述べて違いもまた見逃さない。だがさらに分析を進めたうえでチボーデは、この相違さえも「外面的なもの」にすぎず、同書は決して命題や弁論などではなく、あらゆるジッド作品と同様、「ひとつの問題にかんする活きた視点」の提示なのだとは結論づけている⁷³⁾。

最終段落では復刊後9カ月を経た『新フランス評論』の今後進むべき方向が問われている。同誌の事務を担っていたイザベル・リヴィエール(ジャックの妻で、アラン=フルニエの実妹)に代わり、同年7月号からはジャン・ポーランが正式に編集次長に就き、それによって体制は強化されるが、大戦後の混乱期にあって雑誌の進路選択は喫緊の課題であった。とりわけ重要な問題と認識されていたのが敗戦国ドイツとの関係で、この案件をめぐる意見交換は翌年の

ジッド宛書簡へも繋がってゆく。

その書簡の提示・紹介に先立ち簡単な導入的説明——。ジッドは、1920年初めのダダ・シュルレアリスムへの一時的・挿話的な接近の後、翌年にかけて2つの自伝的作品を極少数の私家版で上梓した。『一粒の麦』初版と『コリドン』第2版である。いっぽうチボーデは『フランス生命の30年』3部作のうち、『シャルル・モーラスの思想』(1920年)と『モーリス・バレスの生涯』(1921年)を公刊している。メディアでの評論活動としては、後者が週刊紙『ロピニオン』1921年8月13日号に載せた「国際時評」に注目しよう⁷⁴⁾。この時評の主旨は突き詰めて言えば、ヨーロッパを国家間の観点からではなく、あくまで人間の観点から捉えよ、というもので、これに共鳴したジッドは『新フランス評論』11月号に「仏独間の知的関係」と題する一文を発表する。『デア・ノイエ・メルクール』6月号でドイツ人の立場から同様な意見を述べていたエルンスト・ローベルト・クルティウスの文章も引きながら⁷⁵⁾、作家は持論の展開よりも、むしろ両論文の紹介に重きを置く。そして紙幅の過半を抜粋の提示に割いた後、「『新フランス評論』が〔仏独の関係回復の〕一助たりえんことを。おそらく今日それに増して重要な務めはなかろう」と結んだのである⁷⁶⁾。これを讀んだチボーデが早速ジッドに送ったのが次の書簡であった——

ウブサラ、[1921年] 11月8日

親愛なるジッド

『新フランス評論』掲載のご高論を拝読し大変うれしく存じました。議論の出発点となるべき明白で幾分なりとも大きな事柄にかんして、我々は思想共同体であり、また事態の進展にあわせ今後もそうであり続けるでしょう。『新フランス評論』の進むべき道をご高論のようなかたちでお示しになったのはすばらしいことです。今日、他の雑誌はいずれもこの種の独立性を維持しえていないだけに、『新フランス評論』が自らその方向に進んでいくのは至極当然のこと。ほかを見渡せば、大いに評価すべきは『ロピニオン』紙が執筆者の独立性を尊重しており、日々の具体的な問題にかんし優れた論壇となっています。『新フランス評論』のために何をなしうるのか、我々の間でしっかりと話し合うことが望ましいでしょう。3週間後には上京の予定ですので、是非お目にかかりたく存じます。手紙で申し上げられることはみな大ざっぱな概略になってしまいます。直接お話ししなければなりません。

9月にベルリンでトーマス・マンに会いましたが、その意見はほぼクルティウス論文の内容に呼応していました。彼らのような考え方が今後影響力を増してこなければなりません。敬具。

アルベール・チボーデ

主要段落の内容についてはもはや贅言は無用であろう。ただ11月末ないし12月初めのチボーデの上京にかんし付言しておけば、この折りにも彼がジッドと会うことはなかったはずである。作家は11月24日にはパリを離れキュヴェルヴィルに到着、翌月14日まで同地に滞在していたからである。

結びの短い段落に名の挙がるトーマス・マンについて、既知の資料にはチボーデとの面談に関わる記述はいっさい確認されていない。ただし当時ミュンヘン在住だったマンが9月9日から13日までベルリンを訪れた事実は判明しているので、両者の出会いがその時のことであるのは間違いない。またドイツ人作家が仏独関係の行く末にかんしクルティウスと意見を共にしていたことは、後者がジッドに宛てた同年7月24日付の書簡によっても証される――

『デア・ノイエ・メルクール』に発表した拙論の主旨にご賛同の由、大いに喜んでおります。トーマス・マンもこれに深く共感すると手紙を寄せてくれました。拙論の全部もしくは一部が『新フランス評論』に掲載され、あなたが註を加えてくださるとすれば素晴らしいことです。そうなれば、ドイツとフランスの緊張緩和が一步大きく前進することになろうと確信しております、私が公式化し、あなたが同意を示してくださった態度が両国民の精神的エリートたちに基盤として受け入れられるならば、得るところ大であると信じます。⁷⁷⁾

ここに述べられる両国融和に向けた試みは、8年間の中断の後、翌1922年に再開される「ポンティニー旬日懇話会」の中心的な課題ともなっていく。次号掲載分ではその辺りの経緯についても紹介することにしよう⁷⁸⁾。

(次号に続く)

註

- 1) 紙誌掲載論文の一覧としては次の書誌を参照―― John C. DAVIES, «Bibliographie des articles d'Albert Thibaudet», *Revue des Sciences Humaines*, avril-juin 1957, pp. 197-229.
- 2) Voir *Littérature*, n° 146 (n° spécial Albert Thibaudet), juin 2007 ; Albert THIBAUDET, *Réflexions sur la littérature*. Édition établie et annotée par Antoine COMPAGNON et Christophe PRADEAU, Paris : Gallimard, coll. «Quarto», 2007 ; et *Réflexions sur la politique*. Édition établie par Antoine COMPAGNON, Paris : Robert Laffont, coll. «Bouquins», 2007.

- 3) Voir Alfred GLAUSER, *Albert Thibaudet et la critique créatrice*, Paris: Éditions Contemporaines, 1952; John C. DAVIES, *L'Œuvre critique d'Albert Thibaudet*, Genève: Libr. E. Droz / Lille: Libr. Giard, 1955; Marcel DEVAUD, *Albert Thibaudet, critique de la Poésie et des Poètes*, Fribourg: Éditions Universitaires, 1967.
- 4) チボーデ・アルシーヴ散逸の経緯については次を参照—— André TALMARD, «Les manuscrits de Thibaudet», in *Rencontres Albert Thibaudet 1986*. Actes du colloque organisé les 18-20 septembre 1986, *Société des Amis des Arts et des Sciences de Tournus*, t. LXXXV, 1986, pp. 132-134.
- 5) Voir Michel LEYMARIE, *Albert Thibaudet, «l'outsider du dedans»*, Villeneuve-d'Ascq: Presses Universitaires du Septentrion, 2006.
- 6) 日付の誤りのうちには月記述の誤読も含まれる。たとえばレイマリーは「9bre」「Xbre」という記述をそれぞれ「9月」「10月」と読むが、言うまでもなくこれは「11月」「12月」のこと。
- 7) 『狭き門』の生成から雑誌初出・単行出版にいたる経緯については、次の拙稿を参照されたい——「ジッド『狭き門』の成り立ち——構想・執筆から雑誌初出、主要刊本まで」、田口紀子・吉川一義編『文学作品が生まれるとき——生成のフランス文学』所収、京都大学学術出版会、2010年10月、375-397頁。
- 8) Voir Albert THIBAUDET, *Ronsard*, mémoire couronné par l'Académie Française, Tournus: A. Miège, 1896; et *Le Cygne rouge*, mythe dramatique en 3 actes, un prologue et un épilogue, Paris: Mercure de France, 1897. その他に、この時点までの単行出版としては次のものがある——*Les Universités populaires*. Conférence d'ouverture faite le 14 novembre 1903 à l'Université populaire d'Abbeville, Cayeux-sur-Mer: Coll. La Picardie, 1903.
- 9) チボーデは1895年、哲学のアグレガシオンに失敗するが、第1次試験合格と同等の資格者 (bi-admissible) とされ、これによって教職資格を得た。彼が哲学教師として初めて高校の教壇に立ったのは1898年のこと。
- 10) 『ラ・ファランジュ』創刊号から2年弱にわたり連載されたこの紀行記が単行書として刊出するのは20年後のことである。Voir Albert THIBAUDET, *Les Images de Grèce*, Paris: Albert Messein, coll. «La Phalange», 1926.
- 11) Lettre de Royère à Gide, du 12 juillet 1909, in Jean ROYÈRE & André GIDE, *Lettres (1907-1934)*. «Votre affectueuse insistance». Lettres réunies, annotées et présentées par Vincent GOGIBU, Paris: Éd. du Clown Lyrique, 2008, pp. 34-35. なおロワイエールは、ごく短い言及ながら、前年5月23日のジッド宛書簡でもチボーデを「名譽に恬活とした偉大な芸術家」と形容していた (voir *ibid.*, p. 28).
- 12) 以下の論述で引用・言及するジッド=チボーデ往復書簡のレフェランスについては、煩瑣なれば逐一の指示は行わない。稿末に「往復書簡一覧」掲げるので、これを参照されたい。

- 13) Albert THIBAUDET, «*La Porte étroite*, par André Gide», *La Phalange*, n° 40, 20 octobre 1909, pp. 541-546.
- 14) ただしこの博士論文は結局は未完に終わる。
- 15) Voir *Bibliothèque de M. Albert Thibaudet*, catalogue de la vente publique des 12-16 février 1937 à l'Hôtel Drouot, Paris: Libr. Giraud-Badin, 1937, p. 45, item n° 234. なおチボーデのほかに、筆者が確認しえたかぎりでも、ポール・クローデル、アルチュール・フォンテーヌ、ポール・デジャルダン、マルセル・レイ、アンリ・アルベール、ポール・ドゥルオ、エミール・ヴェラーレン、エドモンド・ゴス、フーゴー・フォン・ホーフマンスタールらが、同じ時期にジッドからこの豪華版を贈られている。またゴスやホーフマンスタールの旧蔵本が示すように (voir *U.S.A. National Union Catalog*, item n° NG 0201485; Claude FOUCART, «*André Gide et Hugo von Hofmannsthal ou la rencontre d'un grand enfant*», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 43, juillet 1979, p. 15), ジッドは刊本に直接署名するのではなく、自筆献辞を記した小型カードをこれに添えるかたちを採った模様。じっさいチボーデ旧蔵本の場合もそれ自体に献辞は入っていない。
- 16) Albert THIBAUDET, «*André Gide : Le Retour de l'Enfant prodigue*», *La Phalange*, n° 49, 20 juillet 1910, pp. 66-68.
- 17) 言うまでもなくルメートの著書『古の本の余白に』をふまえた表現。同書はまさに「福音書の余白に」と題された一章を含む。Voir Jules LEMAITRE, *En marge des vieux livres*, 2 vol., Paris: Société française d'imprimerie et de librairie, 1905-07.
- 18) Voir Albert THIBAUDET, «*André Gide*», *La Revue de Paris*, 34^e année, n° 16, 15 août 1927, pp. 742-775. 残念なことに同論文は、その重要性にもかかわらず、雑誌初出後は今日に至るまでどこにも再録されていない。
- 19) Albert THIBAUDET, «*Épilogue à La Poésie de Stéphane Mallarmé*», *La NRF*, n° 158, 1^{er} novembre 1926, p. 553.
- 20) Albert THIBAUDET, *Paul Valéry*, Paris: Grasset, 1923, p. 2.
- 21) Lettres de Thibaudet à Paul Valéry, des 1^{er} et 19 février 1911, citées par Michel LEYMARIE, *op. cit.*, p. 42.
- 22) THIBAUDET, «*Épilogue à La Poésie de Stéphane Mallarmé*», *art. cité*, p. 561.
- 23) Voir Albert THIBAUDET, «*La Poésie de Mallarmé (Fragments)*», *La Phalange*, n° 54, 20 décembre 1910, pp. 481-506; «*La Poésie de Mallarmé, II - Le Vers*», *ibid.*, n° 55, 20 janvier 1911, pp. 20-47. 編集部註はこの2章を近刊書の「第1部第11・12章」と付記したが、実際の構成では第1部第9章および第2部第5章となる。なお、後掲の3月30日付チボーデ書簡が述べるように、第2回掲載分には雑誌掲載後、相当量の修正・加筆が施されている。
- 24) 初回予告では書名は『ステファヌ・マラルメ』であったが、それ以後は一貫して『マラルメの詩』(ブレノン「ステファヌ」はなし。ただし下記の雑誌掲載論文の題名と同論文に付された編集部註ではブレノンあり)。価格は1912年1月号の最終予告

- で10フランと設定されていた（実際の刊本もこの価格で発売される）。なお、この間の1911年11月号には、刊本第2部第11章に相当する3つ目の抜粋が先行掲載されている（voir Albert THIBAUDET, «La Poésie de Stéphane Mallarmé: Le Théâtre», *La Phalange*, n° 65, 20 novembre 1911, pp. 385-402）。
- 25) Albert THIBAUDET, *La Poésie de Stéphane Mallarmé*, Paris: Éd. de la NRF, 1912 [sans ach. d'impr.; parution janvier 1913]; MALLARMÉ, *Poésies*, même éditeur, 1913 [ach. d'impr. 24 janvier 1913]). ちなみにチボーデは後年、自著が「いくつかの出版社に断られ、私費で500部印刷したが、大戦終結まではほとんど売れなかった」旨を記すが（THIBAUDET, «Épilogue à *La Poésie de Stéphane Mallarmé*», *art. cité*, p. 553), 上述の流れを見るかぎり、「いくつかの出版社に断られた」という部分には若干の誇張が含まれているよう。
 - 26) クローデルへの影響について論じた部分は全面的に削られた模様で、ただ『黄金の頭』から『人質』までの軌跡におけるマラルメの影響がほんの数語で触れられるだけである（voir *La Poésie de Stéphane Mallarmé, op. cit.*, p. 362）。
 - 27) *Ibid.*, pp. 364-365. 訳出引用にあたっては、田中淳一・立仙順朗による同書訳を参照した（『マラルメ論』、沖積舎、1991年、324頁。ただし一部を改変）。
 - 28) ヴィゼヴァとピカにたいする批判は第3部第3章「続誦（テ・ゼッサントのために）」の註1、またラザールにたいする批判は第1部第6章「難解さの源泉」の註7（*ibid.*, pp. 44 et 328）を参照。
 - 29) 第1次大戦による8年間の中断を挟み、デジャルダンが80歳で没する前年（1939年）まで続いたこの「旬日懇話会」の全体像については、次の2著書を参照——*Paul Desjardins et les Décades de Pontigny. Études, témoignages et documents inédits*, présentés par Anne HEURGON-DESJARDINS, Paris: PUF, 1964; François CHAUBET, *Paul Desjardins et les Décades de Pontigny*, Villeneuve-d'Ascq: Presses Universitaires du Septentrion, 2000.
 - 30) 2月2日付シュランベルジェ宛書簡でジッドはチボーデに手紙を書いた旨を短く記している。Voir André GIDE - Jean SCHLUMBERGER, *Correspondance 1901-1950*. Édition établie, présentée et annotée par Pascal MERCIER et Peter FAWCETT, Paris: Gallimard, 1993, p. 365.
 - 31) ちなみにアン・ダンカンが編んだポール・アダグン書簡選集には、この『続プレテクト』とアダグン『救世主の軌道』（刊年表示なし）の受領を報告する3月30日付のチボーデ書簡が収められている。編者は同書簡を1912年のものと推定するが、明らかに1911年の誤りである。Voir *L'époque symboliste et le monde proustien à travers la correspondance de Paul Adam 1884-1920*, établie, présentée et commentée par J. Ann DUNCAN, Paris: A.-G. Nizet, 1982, p. 114.
 - 32) Voir André GIDE, *Œuvres complètes*, Paris: Éd. de la NRF, t. V [1933], p. 252; et *Essais critiques*. Édition présentée, établie et annotée par Pierre MASSON, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1999, p. 162.

- 33) Auguste ANGLÈS, *André Gide et le premier groupe de «La Nouvelle Revue Française»*, 3 vol., Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque des Idées», 1978-86, t. II, p. 25; voir aussi Albert THIBAUDET, «Taormine», *La NRF*, n° 27, 1^{er} mars 1911, pp. 387-400.
- 34) AGATHON [pseud. collectif de Henri MASSIS et Alfred de TARDE], *L'Esprit de la Nouvelle Sorbonne. La crise de la culture classique. La crise du français*, Paris: Mercure de France, 1911. なお「新ソルボンヌ」をめぐる論争の詳細と歴史的な射程については特に次の著書を参照——Claire-Françoise BOMPAIRE-EVESQUE, *Un débat sur l'Université de la Troisième République. La lutte contre la Nouvelle Sorbonne*, Paris: Aux Amateurs de Livres, 1988.
- 35) GIDE – SCHLUMBERGER, *Correspondance 1901-1950*, *op. cit.*, p. 365.
- 36) 前註 14 および本文の相当箇所を参照。
- 37) 前註 23 を参照。
- 38) GIDE – SCHLUMBERGER, *Correspondance 1901-1950*, *op. cit.*, p. 368.
- 39) Voir Albert THIBAUDET, «La Nouvelle Sorbonne», *La NRF*, n° 29, 1^{er} mai 1911, pp. 693-700; M[ICHEL] A[RNAULD], «L'Esprit de la Nouvelle Sorbonne, par Agathon», *ibid.*, pp. 760-763. 本段落における引用の出典はすべて後者。
- 40) THIBAUDET, *ibid.*, p. 697.
- 41) Voir la lettre de Barrès à Agathon, du 21 octobre 1910, citée par Henri MASSIS, *Barrès et nous*, Paris: Plon, 1962, p. 127. ただしバレスは以下に触れる知識人同盟「フランス文化のために」の加入メンバーでもあった (voir MASSIS, *Évocations. Souvenirs 1905-1911*, Paris: Plon, 1931, p. 125)。
- 42) ちなみに、ジッドらが『新フランス評論』の「素晴らしい新規寄稿者になりうる」と期待した共作者アガトンのうち、タルドは翌 1912 年、同誌に 2 度書評を寄せるが、マシスが寄稿することは一度もない。そればかりか彼は 20 年代にはジッドにたいし徹底した批判を展開することになる。
- 43) この初版のうち処分を免れたのは、ジッドとともに廃棄作業に関わったガストン・ガリマールの証言では「新フランス評論出版の記録資料用 6 部のみ」(voir la lettre de Gaston Gallimard à M. Méric, du 24 juillet 1916, fac-similé reproduit dans la *Bibliographie des Éditions de la Nouvelle Revue Française 1911-1919*, Paris: Henri Vignes livres anciens, 1997, n. p.), あるいは従来のジッド書誌によれば「10 部程度」とされるが、筆者がこれまで古書店カタログや競売目録等で確認しえた実数から見て、おそらく 20 部前後はあったものと推測される。また行数が不揃いなのは 3 頁というのが通説として各所にくり返し記されるが、実際には 10 頁である。
- 44) Voir LEYMARIE, *op. cit.*, p. 57, note 125. なおジッドがデュ・ボスを初めて知ったのは、同年 3 月 26 日、画家ジャック＝エミール・ブランシュ宅での会食においてであった (同席者はモーリス・バレス夫妻と画家シャルル・コッテ)。
- 45) Albert THIBAUDET, «Deux romans: André Gide, *Isabelle* – Paul Adam, *La Ville*

- inconnue*», *La Phalange*, n° 62, 20 août 1911, pp. 159-160.
- 46) *Ibid.*, pp. 160-162.
- 47) LEYMARIE, *op. cit.*, p. 38.
- 48) チボーデの問いにたいしヴァレリーは、マラルメからの影響は「ほぼ皆無」である
と、この詩人独特の言い回しをもって答えていた (voir sa lettre à Thibaudet,
s. d. [février-mars 1911], in Paul VALÉRY, *Lettres à quelques-uns*, Paris : Gallimard,
1952, pp. 96-100 ; voir aussi Michel JARRETY, *Paul Valéry*, Paris : Fayard, 2008,
pp. 342 et 1239, note 38)。またこれと同時期のことが否かは定かでないが、ドニ・
ペルトレはチボーデがヴァレリーに『ステファヌ・マラルメの詩』の校正刷を送っ
たと記している (voir Denis BERTHOLET, *Paul Valéry 1871-1945*, Paris : Plon,
1995, p. 182)。
- 49) Jean SCHLUMBERGER, *Éveils*, Paris : Gallimard, 1950, p. 200. 義弟と対話したジッド
はその感想を 12 月 27 日付コポー宛書簡で次のように伝えている——「マルセルと
私の間はお仕舞いです。そのことに彼は何ら気づいていないというのですから
！ また、私のほうはそのことに何カ月後、何年後も今日と変わらず苦しみ続ける
ことになるのですから！」(André GIDE - Jacques COPEAU, *Correspondance 1902-
1949*. Édition établie et annotée par Jean CLAUDE, Paris : Gallimard, «Cahiers
André Gide 12-13», 2 vol., 1987-88, t. I, p. 535)。このような義弟への失望感は、
『日記』においても後年までくり返し表明される。
- 50) GIDE - SCHLUMBERGER, *Correspondance 1901-1950*, *op. cit.*, p. 472.
- 51) Voir Albert THIBAUDET, «La Littérature : Une thèse sur le Symbolisme», *La
NRF*, n° 39, 1^{er} mars 1912, pp. 159-160 et 162 ; voir aussi André BARRE, *Le
Symbolisme, essai historique sur le mouvement poétique en France, de 1885 à
1900*, Paris : Jouve, 1912.
- 52) 『新フランス評論』の常設欄担当は、結果的にはチボーデを『ラ・ファランジュ』から
遠ざけてしまう。ヴァレリー・ラルポーの場合に続く今回の「移籍」の故に、同
誌主宰のロワイエールはジッド・グループにたいし若干の遺恨を抱くことになる。
- 53) André GIDE, *Journal I, 1887-1925*. Édition établie, présentée et annotée par Éric
MARTY, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p. 731.
- 54) なお、このセッションの具体的な内容や、討論での参加者の発言については特に以
下を参照——Auguste ANGLÈS, *op. cit.*, t. II, pp. 373-377 ; «Marcel Drouin et le
groupe de la NRF à Pontigny (1912) : la décade dévoilée», présenté par Pascal
MERCIER, *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 99, juillet 1993, pp. 423-444.
- 55) ブザンソン時代のチボーデについては、ヴィクトル・ユゴー高校で彼の教えを受け
た作家アンドレ・ブークレールの証言を参照——André BEUCLER, «Thibaudet,
professeur d'histoire à Besançon», *La NRF*, n° 274 (n° spécial Thibaudet), 1^{er}
juillet 1936, pp. 76-83.
- 56) André GIDE, *Le Retour de l'Enfant prodigue, précédé de cinq autres traités*,

- Paris : Éd. de la NRF, 1912 [parution janvier 1913]. ちなみに、この刊本はクロードルやロマン・ロラン、アンドレ・シュアレス、エミール・ヴェラーレン、アルベール・モッケルら、少なくとも 20 名前後に贈られたことが、献辞入り刊本や相手からの札状により確認されている。
- 57) この書状は二折にされた用紙 1 葉からなるが、チボーデの署名が記されていたはずの最後の四半分は切り取られ残っていない。受け手のジッドがその部分をメモ用にも使用したためか。
- 58) Albert THIBAUDET, *Les Heures de l'Acropole*, Paris : Éd. de la NRF, 1913, p. 63. なお同書は 1929 年、加筆・修正のうえ『アクロポリス』の新タイトルで再版される (*L'Acropole*. Illustré de 47 photographies de Fred BOISSONNAS, Paris : Éd. de la NRF, 1929)。
- 59) André GIDE, «Verlaine et Mallarmé», *La Vie des Lettres*, avril 1914, p. 9 (repris dans ses *Œuvres complètes, op. cit.*, t. VII [1934], p. 423, et in *Essais critiques, op. cit.*, p. 503)。
- 60) 手紙はおそらくチボーデの時評を独立した担当欄「文学における考察」に格上げする計画にかかわるもので、ジッドはこれを当人に転送するようリヴィエールに言づけている。Voir André GIDE - Jacques RIVIÈRE, *Correspondance 1909-1925*. Édition établie, présentée et annotée par Pierre de GAULMYN et Alain RIVIÈRE, avec la collaboration de Kevin O'NEILL et Stuart BARR, Paris : Gallimard, 1998, pp. 435-436.
- 61) 本段落の記述はもっぱらアントワーヌ・コンパニオン、クリストフ・ブラドー共同作成のチボーデ年譜に依る。Voir «Albert Thibaudet 1874-1936», in THIBAUDET, *Réflexions sur la littérature*, éd. précitée, p. 38.
- 62) Voir Albert THIBAUDET, «La Littérature : Romans pendant la guerre», *La NRF*, n° 69, 1^{er} juin 1919, pp. 129-142.
- 63) 『レ・ヌーヴェル・リテレール』誌 1924 年 10 月 25 日号に掲載されたアンドレ・ルーヴェールの論文 «Le contemporain capital: André Gide» による表現。なお、この論文タイトルはルーヴェールの著書『世捨て人と悪党』(*Le Reclus et le Retors. Gourmont et Gide*, Paris : G. Crès & Cie, 1927, pp. 121-140) に収録のさい「詐欺師アンドレ・ジッド André Gide imposteur」に変更された。
- 64) Voir André GIDE, «Voyage en littérature anglaise», *Verve*, printemps (mars-juin) 1938, vol. 1, n° 2, pp. 14-15.
- 65) Jacques RIVIÈRE, «Le Roman d'aventure», *La NRF*, n° 53-55, 1^{er} mai-1^{er} juillet 1913, t. IX, pp. 748-765, 914-932 et t. X, pp. 56-77. ジッド・新フランス評論グループと冒険小説の問題を扱った研究としては以下を参照——Kevin O'NEILL, *André Gide and the Roman d'Aventure*, Sydney : Sydney University Press, 1969 ; voir aussi la postface d'Alain CLERVAL pour *Le Roman d'Aventure* de Rivière publié en volume aux Éd. des Syrtes (Paris, 2000), pp. 83-121.

- 66) Voir Albert THIBAUDET, «Réflexions sur la Littérature: Roman de l'Aventure», *La NRF*, n° 72, 1^{er} septembre 1919, pp. 597-611.
- 67) Albert THIBAUDET, *Histoire de la littérature française de 1789 à nos jours*, Paris: Stock, 1936, pp. 537-538.
- 68) Voir Albert THIBAUDET, «Réflexions sur la Littérature: Critique française et critique allemande», *La NRF*, n° 143, 1^{er} août 1925, pp. 223-231.
- 69) ちなみにジッド作品の最初のスウェーデン語訳(リュシアン・モーリーの解題を付したエラルド・エマン訳による『狭き門』と『背徳者』)はちょうどこの時期に公刊されている(voir André GIDE, *Den trångra porten* et *Den omoraliske*, traduits par Herald HEYMAN, Stockholm: Geber, 1920 et 1921)。デフワイユらの計画が実現に至らなかった原因のひとつとも推測しうる。
- 70) Voir *André Gide*. Pages choisies, Paris: G. Crès et Cie, coll. «Bibliothèque de l'Adolescence», s.d. [1921]. なお、同選文集は後に表紙だけを取り替えて継続販売された(voir *André Gide*. Romans et essais, Paris: G. Crès et Cie, coll. «Le Florilège contemporain», s.d.)。
- 71) Voir Jacques PAOLI, «Albert Thibaudet en Suède», *La NRF*, n° 274 (n° spécial Thibaudet), 1^{er} juillet 1936, pp. 84-86.
- 72) Voir l'édition critique de *La Symphonie pastorale*, établie et présentée par Claude MARTIN, Paris: Lettres Modernes Minard, coll. «Paralogue», 1970, pp. CXLIX-CL.
- 73) Albert THIBAUDET, «Réflexions sur la Littérature: *La Symphonie pastorale*», *La NRF*, n° 85, 1^{er} octobre 1920, pp. 587-598. ちなみに他の書評も大半は7月末から年末に集中している。ルネ・ラーヌとルネ・サロメの論評だけは同年初めの発表だが、これはいずれも雑誌初出テキストを対象としたものである(voir René LASNE, «*La Symphonie pastorale*», *La Dépêche de Rouen*, 25 janvier 1920; René SALOMÉ, «*La Symphonie pastorale*», *Revue des Jeunes*, c. XXIII, n° 3, 10 février 1920, pp. 334-344)。
- 74) Voir Albert THIBAUDET, «Chronique internationale: Petites questions de goût», *L'Opinion*, 14^e année, n° 33, 13 août 1921, pp. 183-184.
- 75) Voir Ernst Robert CURTIUS, «Deutsch-französische Kulturprobleme», *Der Neue Merkur*, juin 1921, pp. 145-155.
- 76) André GIDE, «Les Rapports intellectuels entre la France et l'Allemagne», *La NRF*, n° 98, 1^{er} novembre 1921, pp. 513-521. Voir aussi la lettre de Gide à Curtius, du 14 octobre 1921, in *Deutsche-französische Gespräche 1920-1950. La Correspondance de Ernst Robert Curtius avec André Gide, Charles Du Bos et Valéry Larbaud*, Francfort-sur-Main: Vittorio Klostermann, 1980, p. 38.
- 77) Lettre de Curtius à Gide, du 24 juillet 1921, in *Deutsche-französische Gespräche 1920-1950, ibid.*, p. 34. 同様の主旨は、クルティウスがエミール・マイリッシュ夫

人（ルクセンブルグの富豪夫人で、同市郊外のコルパハの城館で汎欧的な文化サークルを主宰した文芸庇護者）に宛てた7月12日付書簡にも記されている——「ジッドが拙論に満足しているというので非常に喜んでおります […]。もし『新フランス評論』が拙論の抜粋を載せ、ジッドがそれに答えるとすれば、もちろん私としては大変嬉しく大いに歓迎するところです。 […] 私は〔エルンスト・ベルトラムとトーマス・マンの〕ふたりが、フランス側でジッドが品位と威厳をもって代表しているプログラム、すなわち、冷静に国民的感情（国粹主義的感情ではなく！）を維持しながらのコスモポリタンの精神（国家間の精神ではなく！）における両国の接近というプログラムに、ドイツ側から喜んで参加するであろうことを承知しております」（*ibid.*, pp. 31-32）。

- 78) 戦後初めての「旬日懇話会」については、とりあえず次の拙稿を参照されたい——「1922年のポンティニー旬日懇話会——ジッドのポール・デジャルダン宛未刊書簡——」, 『ステラ』第19号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 2000年9月, 127-140頁。

ジッド=チボーデ往復書簡一覧（書き手・日付／発信地／レフェランス）

往復書簡の大部分は未刊である（すでに全文が公刊されているのは第15番・第39番のみ）。レフェランス欄においては、オリジナルの所在が判明している場合にはそれを初めに掲げる。カタログや雑誌・書籍などの記述を付したものは、存在だけが確認されるか（第2番）、断片的ながらすでに一部が活字化された書簡である。なおミシェル・レイマリーの著書における引用については、日付の誤りや未決定を修正・補足したものをレフェランス欄に記載した（前註6および本文の相当箇所を参照）。

- | | | | |
|-----|--------------|----------|---|
| 1. | T=22.07.1909 | Annecy | BLJD γ 823-28; LEY, 34. |
| 2. | G=06.11.1909 | Paris | Cat. Rauch (Genève), 15 juin 1969, vente 22, 204. |
| 3. | T=25.06.1910 | Tournus | Coll. particulière; cat. BN, n° 365; YOS, 99. |
| 4. | T=23.10.1910 | Grenoble | BLJD γ 823-1. |
| 5. | T=29.11.1910 | Grenoble | BLJD γ 823-2; LEY, 42. |
| 6. | G=02.12.1910 | Paris | DAV, 42. |
| 7. | T=17.03.1911 | Grenoble | BLJD γ 823-30. |
| 8. | T=30.03.1911 | Grenoble | BLJD γ 823-3; LEY, 36. |
| 9. | T=03.06.1911 | S. l. | BLJD γ 823-4; SCH, 408; LEY, 58. |
| 10. | T=26.07.1911 | Tournus | BLJD γ 823-5. |
| 11. | T=16.01.1912 | Tournus | BLJD γ 823-6; LEY, 38-9. |
| 12. | T=00.02.1913 | S. l. | BLJD γ 823-27. |
| 13. | T=29.02.1920 | Upsal | BLJD γ 823-29; KOF, 251; LEY, 106. |

14. T = 08.11.1921 Upsal BLJD γ 823-22.
15. T = 06.11.1926 Tournus *Le Manuscrit autographe*, n° 7, janvier-février 1927, 38-47.
16. T = 14.12.1926 Tournus BLJD γ 823-32; LEY, 105.
17. T = 12.02.1927 Les Rousses BLJD γ 823-12.
18. G = 18.02.1927 Paris CG.
19. T = 25.07.1927 Tournus BLJD γ 823-9.
20. T = 26.07.1927 Tournus BLJD γ 823-11.
21. G = 27.07.1927 Paris BLJD γ 823-13; J-II, 1162; LEY, 106.
22. G = 28.08.1927 Royan BLJD γ 823-14; (copie dactyl.) γ 823-15; RRS, 1496 et 1574; LEY, 106 et 132.
23. T = 01.09.1927 Tournus BLJD γ 823-8.
24. T = 16.09.1927 Tournus BLJD γ 823-10.
25. T = 04.10.1927 Tournus Cat. vente, Hôtel Drouot, 17 juin 1980, n° 160.
26. G = 29.03.1929 Paris Cat. Thibaudet, n° 238; BAAG, n° 61, 135-6.
27. T = 02.04.1929 Tournus BLJD γ 823-31; LEY, 105 et 131
28. G = 08.01.1930 S. l. BLJD γ 823-16; LEY, 106.
29. T = 28.01.1930 Tournus BLJD γ 823-21; LEY, 105 et 106-7.
30. G = 20.03.1930 Cuverville BLJD γ 823-17; RRS, 1569; LEY, 107 et 131-2.
31. G = 17.02.1931 Paris BLJD γ 823-18; J-II, 1161-2.
32. T = 22.02.1931 Tournus BLJD γ 823-19; J-II, 1162; LEY, 105, 107 et 132.
33. G = 14.07.1933 Cuverville CG.
34. T = 25.07.1933 Tournus BLJD γ 823-20; LEY, 108.
35. G = 31.07.1933 Bruxelles BLJD γ 823-23 (brouillon); LEY, 108.
36. T = 10.08.1933 Tournus BLJD γ 823-7; LEY, 107-8.
37. G = 13.09.1933 Cuverville Arch. Cath. Gide.
38. T = 15.10.1933 S. l. BLJD γ 823-24 (postée vers le 5 novembre).
39. G = 18.06.1935 Paris *La NRF*, n° 262, juillet 1935, 142.
40. G = 27.03.1936 Saint-Louis du Sénégal BLJD γ 823-25.

Références abrégées :

Arch. Cath. Gide : Archives de Mme Catherine Gide, Paris.

BAAG : *Bulletin des Amis d'André Gide*, revue trimestrielle publiée par l'Association des Amis d'André Gide depuis 1968.

BLJD : Bibliothèque littéraire Jacques-Doucet, Paris.

Cat. BN : *André Gide*, catalogue de l'exposition, Paris : Bibliothèque Nationale, 1970.

Cat. Thibaudet : *Bibliothèque de M. Albert Thibaudet*, op. cit.

- CG: Dossiers de la Correspondance générale d'André Gide, Centre d'Études Gidiennes, Tupin-et-Semons.
- DAV: John C. DAVIES, *L'Œuvre critique d'Albert Thibaudet*, *op. cit.*
- J-II: André GIDE, *Journal II, 1926-1950*. Édition établie, présentée et annotée par Martine SAGAERD, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1997.
- KOF: Maaïke KOFFEMAN, *Entre classicisme et modernité: «Le Nouvelle Revue Française» dans le champ littéraire de la Belle Époque*, Amsterdam-New York: Rodopi, 2003.
- LEY: Michel LEYMARIE, *Albert Thibaudet, «l'outsider du dedans»*, *op. cit.*
- RRS: André GIDE, *Romans, récits et soties, œuvres lyriques*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1958.
- SCH: André GIDE - Jean SCHLUMBERGER, *Correspondance 1901-1950*, *op. cit.*
- YOS: André GIDE, *Le Retour de l'Enfant prodigue*. Édition critique établie et présentée par Akio YOSHII, Fukuoka: Presses Universitaires du Kyushu, 1992.